九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

人物と交流Ⅲ(中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書13)

吉田, 洋一
久留米大学：准教授

大島, 明秀
熊本県立大学：准教授

ミヒェル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

https://hdl.handle.net/2324/1434414

出版情報：2014-03-31. City of Nakatsu, Board of Education
バージョン：
権利関係：

人物と交流 III

中津市歴史民俗資料館　分館　医家史料館叢書 XIII

人物と交流 III

ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀共編

中津市教育委員会、平成二六年三月

編者前書き

昨年度の叢書では、従来追究してきた村上家・大江家の理解をより深めるために、村上玄秀、大江文明、大江億司の三人を取り上げましたが、本年度は従来重点を置いてきた村上家に加え、中津で代々医業を修めていた田渕家の資料にはじめて着目しました。また、田代基徳と高木兼寛に関する寄稿論文も掲載しました。

平尾は、明治初期に西洋の近代的な看護学の導入に大きく貢献した二人の九州人を取り上げ、両者の親交について新史料を用いて検証しました。

大島は、平成二三年度に寄託された田渕家資料の中から、とりわけ「醫療歌配劑秘本」に焦点を当て、その内容の分析と位置づけを行いました。検討を進める中で、同写本の書写者がこれまで中津医学史に描かれることのなかった町医久恆元的であることを突き止め、加えてこの人物の周辺を追跡しました。

吉田は、村上医家史料館所蔵の掛幅について調査をしました。この史料は、計十一点の書状・揮毫・紙箋類を一点に表装したもので、杵築の三浦梅園や日出の帆足万里といった著名な学者の作品が確認されました。

昨年度から始めた「資料紹介」については、質・量ともに拡充させました。

中津の史料の奥深さや内容の豊富さを、改めて再認識していただけることと期待しています。

平成二六年　春

編者一同

目次

編者前書き
凡例

【原著論文】

田代基徳と高木兼寛―近代看護学の導入に貢献した二人の九州人　平尾真智子……1

中津の医家田渕家蔵「醫療歌配劑秘本」写本について　大島明秀……17

村上家の人物交流―所蔵掛幅を素材として―　吉田洋一……38

【資料紹介】

「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営―　當所美恵子……58

大江医家史料館蔵亀井暘洲揮毫について　中村江里……69

辛島家旧蔵『野槌』について　成富なつみ……74

中津が記された最古の西洋図　ミヒェル・ヴォルフガング……79

Abstracts（英文要旨）……84

索引……87

【凡例】

一、底本は中津市歴史民俗資料館蔵「醫療歌配劑秘本」（史料番号　田渕家九）、及び村上医家史料館蔵「諸名家書簡等貼合掛幅」（史料番号　一〇九）を使用した。

一、原文の欠字・改行・平出・削除線その他体裁は総じて底本の表記を反映するように記した。

一、異体字・略字などは通用する字句に改めた。

一、見せケチや削除線は二重線で、修正前の文字が判読できないほど塗りつぶしている箇所は■、虫損・破損等で判読不能な箇所は□または［　　］にて示した。また修正がある場合は丸括弧で補足した。

一、「醫療歌配劑秘本」原文で、書写者が本文左側に語句とそこに至るまでの線を引き、本文への挿入を示している箇所があるが、読者の便宜を図るため、線を削除し、代わりに挿入箇所と語句の頭に丸を付すことでこれを示した。

一、割注内の記述は隅付き括弧で示した。

田代基徳と高木兼寛 ― 近代看護学の導入に貢献した二人の九州人

平尾　真智子

要旨

大分県中津市出身の医師田代基徳（一八三九年生）には、看護史の視点からは明治最初の翻訳看護書を発刊したという大きな功績がある。田代基徳は九州出身の医師高木兼寛（一八四九年生）と親交があった。高木兼寛（たかぎかねひろ）はわが国で最初の看護学校を創設した人物である。両者には明治初期の日本の近代看護学の導入に際し尽力した形跡が顕著であるが、交流があったことはこれまであまり知られていなかった。

田代基徳と高木兼寛は、田代は豊前、高木は薩摩とともに九州の出身である。また英国人医師ウィリスからともに英国医学を学んでいる。田代は旧幕府側の医学所教員で後に陸軍軍医となり、高木は新政府軍の海軍軍医にありともに軍医である。田代は高木の医学研究会「成医会」の結成に幹事として参加、成医会の例会記事は田代の『医事新聞』にも掲載された。高木は田代の私的医学塾である医学院の教師となり、また田代の病体解剖社で病理解剖を行っている。九州は古代から大陸との交流があり、江戸時代には対外関係の窓口となった。九州には異文化交流・異文化受容の地域力がある。田代と高木はともにこの九州の地で育ち、明治初期に西洋の近代的な看護学の導入に尽力した。

キーワード

田代基徳、高木兼寛、近代看護学、翻訳看護書、明治期

一、はじめに

大分県中津市出身の医師田代基徳について昨年（二〇一三）筆者は、看護史の視点から一つの論文をまとめた[1]。その際、田代基徳と九州出身の医師高木兼寛に親交があった事実は確認できたが、この二人に焦点を当てた十分な論述ができなかった。看護史の観点からみると、両者には明治初期の日本の近代看護学の導入に際し尽力した形跡が顕著であり、九州出身の医師という共通点があった。

両者の関係については既に川嶌眞人氏の田代の研究[2]のなかに若干記述されているが、本論文では田代に関する新資料を追加するとともに、両者の親交についても新しい資料を用いて、両者が看護史上に果たした功績についてまとめたい。

二、中津藩出身の医師田代基徳の人物像と近代看護学への貢献

田代基徳（一八三九～一八九八）（写真一）の生涯や著作、看護史上に果たした役割に関する記述は、既に前述の論文[3]に記述した内容をもとに一部新事実を追加したものを掲載する。田代基徳の人物像の記載については、便宜上五期に分けた。

⑴ 田代基徳の人物的背景

（一）出生から地元での勉学の時代

田代基徳は、天保一〇（一八三九）年四月一五日、豊前国中津藩の藩医松川修山の子として生れ、従兄の田代春耕の家を継いだ。幼名は泰二、後に一徳、さらに基徳と改める。太楽と号した。安政四（一八五八）年に筑前国秋月の江藤養泰に入門して漢方医学を学んだ。翌年肥後山鹿町の武藤璋禮について、賀川流産科・杏蔭流整骨術や華岡流外科を学んだ。

（二）適塾、医学所での勉学時代

文久元（一八六一）年大阪に出て、四月一八日緒方洪庵の適塾に入門し、按摩で生活費を捻出しながら蘭学を勉強した。文久二（一八六二）年八月、洪庵が幕府西洋医学所頭取として江戸に赴任すると、文久三（一八六三）年江戸に到り、五月に医学所に入門した。同年六月に洪庵が死去すると、後任に松本良順が就任した。松本が医学書以外の兵学書などを読むことを禁止したのを不服として足立寛らとストライキを始めたが、同郷の先輩福沢諭吉にたしなめられ中止したという一幕もあった。元治元（一八六四）年二月医学所句読師を拝命する。蘭学と数学を教えた。慶應元年軍艦蟠龍の軍医となり、慶應三（一八六七）年医学所塾監を命じられる。

慶應四（一八六八）年、鳥羽・伏見の戦役で幕府軍が敗れると、当時の幕府医学所頭取松本良順は数名の生徒をつれて浅草今戸の寺に病院を開設し、大阪から来る伏見戦争の負傷者を収容して負傷兵の治療にあたったが、薩長軍が江戸に近づいたために東北に脱走した。このとき田代は閉鎖されるまでこの幕府の病院に留まった。

（三）新政府による医学所教員の時代

同年六月新政府は旧幕府の医学所を復興し、横浜の軍陣病院を江戸の旧藤堂邸に移し大病院とし、医学所と大病院と合併して医学校兼大病院という新組織にした。ここで田代は医

学校の医学助教試補、三等教授となる。この年に『切断要法』を刊行する。

明治元年より下谷練塀町に居し、自宅に私塾修文舎（後の医学院）を開いて諸学を教授した。また横浜・前橋等に行医堂を創めて診療に従事した。明治二（一八六九）年医学校が大学東校と改称されると中助教となり、明治四年には文部省出仕となっている。明治五（一八七二）年大助教となる。明治六（一八七三）年には『外科手術』を出版、私塾では英書で医学を教授した。本邦における最初の医学雑誌『文園雑誌』を創刊するが明治七年には廃刊し、後続誌として明治一一年『医事新聞』を発行した。

（四）陸軍軍医の時代

明治七（一八七四）年より陸軍に出仕し二等軍医正となった。明治八年四月には松本順などによるわが国最初の医学会ともいうべき東京医学会社の結成に在官の医師の一人として参加し、幹事六人のなかの一人となっている。明治一〇（一八七七）年二月には近衛第二連隊に属して西南の役に従軍した。

同年、下谷区練塀町の自宅に軍医たちとともに病理解剖と外科技術の修得を目的とする病体解剖社を設立した。その剖検結果を『医事新聞』に掲載、病理解剖は明治一三年まで行なわれた。明治一三年陸軍病院往診課長を併任する。同年、高木兼寛による英国医学派の研究組織「成医会」に慶応義塾医学所関係者の一員として結成に参加、四人の幹事のうちの一人になっている。明治一四年には成医会の会員として施療病院創設有志会に参加し、八名の創設委員のうちの一人となっている。明治一七年一等軍医正に昇任する。

図一　軍医学校時代の田代基徳
（中津市村上医家史料館蔵）。

（五）晩年

明治二四（一八九一）年には田代病院を設立した。明治二五（一八九二）年には陸軍軍医監、陸軍軍医学校長（第六代）に任ぜられた。軍医学校機関紙『陸軍軍医学校』を創刊した。明治二六年休職する。明治二八年日清戦争の勃発に伴って、第三・四の二師団の留守部隊の軍医部長を歴任した。同三〇年官制変更により陸軍一等軍医正と改称された。

日本の外科学、軍陣医学の発展に大いに貢献し、明治三一年三月二三日六〇歳で病没した。遺言により、翌二四日東京大学病理学教授三浦守治らにより病理解剖に付された。墓地は谷中天王寺にある。妻は幕臣戸矢直賢の長女千代子、一女春子がいる。足利の人田部井又助を養子とする。養子田代義徳はわが国初の整形外科の講座を東京帝国大学に開設した。

⑵ 田代基徳の著作・翻訳・校閲に関する活動

前述の論文[4]では計九冊であったが、その後新たに『打診図譜（准児氏）』がみつかり、全部で一〇冊となった。

①『切断要法』田代一徳訳、山城屋佐兵衛、慶應四年.
②『保寿新論』田中則敏抄訳、田代基徳閲、英蘭堂、出版年は不詳。
③『外科手術』上・下、田代基徳著、島村利助、明治六年.
④『飲食要論』上・下、有満（ユーマン）著、中村寛栗、松川修訳、田代基徳閲、蜩笑社、明治七年.
⑤『牛痘弁論』林義衛述、田代基徳閲、島村利助、明治九年.
⑥『動物及び人身生理編』ウィルレム・チャンブル、ロベルト・チャンブル著、田代基徳訳、『百科全書』三、文部省、明治九年. に所収。
⑦『造化生生新論』上・中・下、エルトン述、古矢嘉満子記、田代基徳閲、正栄堂、明治一二年.
⑧『民間養生説約：小学生用』村山義行、田代基徳閲、惇信社、明治一三年.
⑨『打診図譜（准児氏）』[5]、アドルフ・ワイル著、田代基徳撰・有持番纂訳・大橋和太郎校訂、島村利助、明治一三年六月.
⑩『学徒衛生運動要訣』田上耕助編、田代基徳閲、明治二一年.

新しく追加した⑨の『打診図譜（准児氏）』は、医学的診察技術の「打診法」を三二枚にわたって図解したものである。翻訳は有持番であるが、図を選択したのは田代で、診察方法にも関心をもっていたものと思われる。

この他に雑誌として、『文園雑誌』田代家塾（明治六年～明治七年）、『医事新聞』医事新聞社（明治一一年～昭和五年）の二種がある。『文園雑誌』は医学雑誌の嚆矢とされている。『医事新聞』は名前は新聞となっているが体裁は雑誌で、奥付より、田代が医事新聞の持主として名前が掲載されるのは明治一六（一八八三）年の第八七号までとなっている。

(3) 田代基徳の近代看護学の導入への貢献

これらも前述の論文[6]に掲載したものであるが、(五)の『医事新聞』上での足立寛による「看護法」の記載は新しく追加した。

(一) 明治最初の翻訳看護書『看病心得草』の出版

田代基徳はその主著が外科学書であり、外科医である。外科の技術を身につけるため解剖も行なっている。西洋医学による医療を実践するにあたり、いちはやく看護を注視し、医療における看護の重要性を認識、日本の医療者に向けて英書の翻訳ではあるが、看護の単行本を出版した。時代の動向をみる先見性がある。田代は『看病心得草』の題辞で、「病気のとき看護法がよくなければどんな名医、妙薬であってもその効験は少ない」と述べており、医療における看護の力に気づいている。

石原氏による『看病心得草』の紹介記事には、明治八年に田代修文舎から出版された木版本、定価六銭二厘五毛、とある。また翻訳書専門店である島村利助の英蘭堂（東京馬喰町二丁目五番地）の明治八・九年頃の発刊目録には一二二冊の医学書が紹介されているがそのなかに唯一の看護書として、「看病心得草　岡田先生訳田代先生閲　六銭二五　全一冊」があげられていることから、単品で販売されていることがわかるが、出版部数は不明である。

図二　『文園雑誌』
（中津市村上医家史料館蔵）

（二）小学生向けの看護書『民間養生説約：小学生用』（明治一三年刊）の校閲

田代は『民間養生説約：小学生用』（明治一三年刊）の校閲をしている。これはアメリカの家政学の先駆者キャサリン・ビーチャー（Catharine E. Beecher, 1800–1878）の本とカットル（カッター）の医学書の両方を取り入れており、看護の内容はより豊かになっている。田代の主たる翻訳編著書は外科書であるが、校閲した書籍には保寿、飲食、看護、妊娠・出産、小児、養生、運動など健康に関する書籍が多く、これらのことから人間の健康に幅広く関心を持っていたことが考えられる。

（三）明治初期における産婆の教育

田代は明治一一から一三年にかけて田代塾に東京産婆会というものを設け、産婆の教育も実施している。これは田代が西洋産婆の必要なこと、国の基礎は産婆の良否にかかわる事大なりという達識に基づいてできたもので、当時の著名な産婦人科医である桜井病院長、榊順次郎、濱田病院長も来講した、とされる。年譜で田代の思い出を語った杉浦いと子はここで産婆学を学んでいる。田代は医学所で西洋医学を学ぶ前に賀川流産科を学んでおり、産科にも関心があったものと思われる。明治一二年に校閲した『造化生生新論』は妊娠・出産など産科領域に関する西洋医学の内容である。

（四）ヨーロッパの医事制度の紹介

田代はまた明治一五年医師の研修会で「欧州医制略説」という講演を行っている。この講演は家塾の生徒に口述したものとしている。そのなかには、医士、調薬士、獣医、産婆、歯医、看病人、看病尼、医事集会のことが述べられており、医療の全体を視野に入れている。そのうち、看病人となろうとするものは病院で実務を積み、警察医について試験を受けた後に本職に従事するという法があること、看病尼は宗徒の一種で人の病を看護することを自己の責任とするもので、一定の試験を経なければ営業できないと紹介しており、医療職の資格認定の方法について外国の情報を得ている。

（五）足立寛の「看護法」を『医事新聞』に連載

先の論文に未記載で今回新しく追加したものは、自身の医学情報誌『医事新聞』（明治二一年）に足立寛の「看護法」[7]を連載したことである。足立寛[8]は適塾・医学所で田代と同期で陸軍軍医であり、日赤篤志看護婦人会の育成を行い、看護教程も著している。

田代は「看護法」連載の緒言において、「古来、児女の教育は音曲歌舞をもってするが、病者の看護法に及ぶは甚だ稀である。女子は人の家に稼するや舅姑良人がもし疾病に苦しむがごときあらば、音曲挿花は何の用をなすか。看護法の日常に習熟せざるべからざるの美論というべし。と記しさらに、左の一遍は正六位勲四等足立寛君日本赤十字社篤志看護婦人

会に於いて講述するところにかかる。其の説く所頗る婦女子に裨益あるを覚ふに因み是を載す」と述べている。

ここに述べられている、児女には歌舞音曲よりも看護法の習熟が必要で、結婚後も家庭で役に立つという考えは、田代の看護観が表出されている第二の文章といえよう。

三、田代基徳と高木兼寛との親交

前述の論文[9]における田代基徳と高木兼寛（一八四九～一九二〇）との関係は、明治一三年に田代基徳が高木兼寛による英国医学派の研究組織「成医会」に、慶応義塾医学所関係者の一員として結成に参加し、四人の幹事のうちの一人になっていること、また田代基徳は明治一四年は成医会の会員として施療病院創設有志会に参加し、八名の創設委員のうちの一人となっていること、などがあげられていることから、両者に親密な交流があったことがわかる。これらは田代の側からみた資料である。

一方、高木兼寛側の資料[10]に於いて、田代基徳は九回出てくる。それらは成医会、有志共立東京病院、慶應義塾医学所、医学会社、緒方洪庵関係の記事である。この両者の資料を総合し新資料を加えて、田代基徳と高木兼寛との親交をまとめるとつぎの5項目のようになる。

(1) 成医会の設立と英国人医師ウィリスからの医学教授

明治一三年英国留学から帰国した高木兼寛は福澤諭吉の弟子松山棟庵とともに「医風を改良し、学術を研究することを」を目的に民間医学団体「成医会」を結成することにした。この趣旨に賛同した医師たちは、明治一四年一月七日、京橋区鑓屋町の東京医学会社の一室に集まり、「成医会」を結成した。この東京医学会社は明治八年に松本順らを中心に結成された医学研究会であったが、明治一二、一三年頃から活動がにぶり休眠状態にあったため、「成医会」にかなりの人が移行した。会員数は六〇名であった[11]。

成医会の会長は高木兼寛、幹事には田代基徳、松山棟庵、隈川宗悦、新宮涼園らが選ばれた。明治一四年一一月一六日、成医会例会で田代や高木が学んだウィリス（William Willis, 1837–1894）[12]は同会の名誉会員に推薦され、つぎの例会で「コレラ病論」という特別講演を行っている。成医会では毎週水曜日に例会を開き、研究活動が行われた。

ウィリスは田代と高木がともに学んだ英国人医師である。医学所は戊辰戦争後、新政府軍の医学校兼病院となり、明治二年一月二〇日からは一年契約で英国人医師ウィリスが院長になった。ウィリスはここで市井の患者を診療し、医学校の学生に講義を始めた。田代はここでウィリスの英国医学に接している。高木は鹿児島医学校でこのウィリスに五年間医学を学び、ここで解剖学を教授している。高木の英国留学にもウィリスの勧めがあった。田代と高木は共に英国人ウィリスに学んだ経験を有している。

田代の発刊による『医事新聞』には高木主宰の成医会例会

の記事が取り上げられている[13]。成医会での高木の講演、成医会例会の記事の掲載が行われている。明治一四年の『医事新聞』第三六号には「成医会」のタイトルが初めて起こされ、例会の開催日とともに「高木兼寛君腹水論を講す」[14]とあり、高木による講義内容が掲載されている。また第三九号には高木による「腸管閉塞論」[15]も掲載された。さらに第四二号、第四四号、第四五号には「黄疸論」が掲載されている[16]。明治一五年の医事新聞第四八号にも成医会例会の記事が掲載されている。

(2) 有志共立東京病院の設立

田代は明治一四年には成医会の会員として施療病院創設有志会に参加し、八名の創設委員のうちの一人となっている。その八名とは会長高木兼寛の他に、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳、小松崎茂助、加藤九郎、成島柳北、子安峻である。明治一五年に施療病院の有志共立東京病院が開院した[17]。病院は明治二〇年には東京慈恵医院となり、現在の東京慈恵会医科大学附属病院として継承されている。

(3) 病体解剖社における高木兼寛による病体解剖の実施

田代の『医事新聞』にはつぎのような、病体解剖社での高木による解剖の記事が掲載されている。明治一四年の「病体解剖社」の記事に、「慢性気管支炎病体解記事　同愛社社員峰千尋岸浪敬司君等ノ嘱託ニ因テ海軍中医監高木兼寛君に請ヒ四月廿日廿一日の両日我病体解剖社ニ於テ解剖ヲ施行セリ。其概略ヲ左ニ掲示ス」とあり、高木兼寛による講述の記事が掲載されている[18]。

(4) 田代の私塾医学院への高木兼寛の教師就任

高木は田代の私営医学教育機関である医学院の教師となっている。また田代の医学院の会員名簿にも高木の名前がある。明治一四年の『医事新聞』[19]第四〇号には「教員追加」の記事において、「高木兼寛　京橋区西紺屋町十番地」、と掲載されており、高木が田代の医学院の教員となっていることがわかる。また明治一五年の『医事新聞』第四八号には「医学院会員姓名録（明治一五年改正）」[20]が掲載され、太之部の最初に「高木兼寛　京橋区西紺屋町十番地」があげられている。このときの医学院会員は約五〇〇名となっている。

(5)『医事新聞』に高木兼寛創設の看護婦教育所の第一回卒業試験問題の掲載

明治二一年の『医事新聞』第二八五号の雑報に「看護婦卒業」[21]の記事があり、日本で最初の看護婦養成機関である東京慈恵医院看護婦教育所の第一回卒業試験問題が卒業試験問題が掲載されている。

○看護婦卒業　東京慈恵医院附属看護婦教育所にては此程同医院長高木兼寛氏臨場の上同所教員松浦千里子か同所生徒三名の卒業試験を施行し何れも卒業したり其試験問題は左の如

し解剖学　第一問　骨の一般種並に其説明　第二問　婦人生殖器の位置名称　○生理学　第一問　消化器の名称並に消化作用　第二問　動物体温を平均せしむる理由　○看護学　第一問　水蛭の用法危険注意　第二問小児病に於て其顔貌に付何を以て徴知し得るや　○英学「ナショナル」読本第三の訳読と対話

有志共立東京病院看護婦教育所の第一回生は明治一八年九月二日に試験のうえ六名が採用され、病院名が東京慈恵医院と改称された翌年の明治二一年一月に五名が卒業している。記事の三名は五名の、松浦千里子は最初の看護婦取締である松浦里の誤りと考えられる。

日本で最初の看護学校である有志共立東京病院看護婦教育所の開設に関する記事は他の医学系雑誌や婦人雑誌にも掲載されているが、卒業試験問題そのものの記載は『医事新聞』のみである。田代が高木からこの問題を入手できる立場にいたことを示すものである。

四、高木兼寛の近代看護学への貢献

(1) 高木兼寛の人物像

高木兼寛（一八四九～一九二〇）（写真二）には、彼の研究者である松田誠氏による伝記『高木兼寛伝』[22]がすでにあり、近年には彼の業績をまとめた大部の『高木兼寛の医学』[23]が同氏により著された。

高木兼寛は九州薩摩藩の郷士である。戊辰戦争に軍医として従軍。維新後、鹿児島医学校で英医ウィリスに師事する。一八七三年海軍軍医となり、一八七五～八〇年、英国セント・トマス病院医学校に留学。帰国後一八八一～一八八二年、成医会講習所（現慈恵医大の前身）、有志共立東京病院（現慈恵医大附属病院の前身）、一八八五年に看護婦教育所（わが国最初の看護婦訓練学校）を創設した。一八八五年、海軍の兵食改善（麦飯）を実行し、脚気撲滅に成功した。一八八五年海軍軍医総監、一九〇五年男爵となり、麦飯男爵といわれる人物である。

図三　留学していた頃の高木兼寛
（東京慈恵会医科大学資料室蔵）。

(2) 高木兼寛の近代看護学への貢献

(一) わが国で最初の看護婦訓練学校、有志共立東京病院看護婦教育所の創設

日本で近代看護教育を始めたのは高木兼寛である。彼は明治一五年八月に施療病院・有志共立東京病院を設立したが、明治一七年一〇月には米国宣教看護婦ミス・リード（Mary. E. Reade）の助力を得て看護教育を開始し、明治一八年には有志共立東京病院看護婦教育所を開設した[24]。これは日本における本格的な近代看護教育のさきがけであり、それは現在の慈恵看護専門学校、東京慈恵会医科大学医学部看護学科に続いている。

(二) わが国最初の看護婦留学生を英国セント・トマス病院に派遣

ミス・リードが慈恵の看護婦教育所を退任してから、高木は看護婦に英国の看護法を研究させるため、セント・トマス病院のナイチンゲール看護学校へ留学させることにした[25]、[26]拝志（後に林）ヨシネ[27]と那須セイとの二名が撰ばれ、明治二〇（一八八七）年七月二三日には日本最初の看護婦留学生として横浜港を出帆し、九月九日にロンドン着いた。パスポート申請時の渡航目的は「看護法研究のため」であるが、看護婦である二人は病気のため、日本から英国に帰国する宣教師ハリソン（F. Harrison）夫人に付添い人として船旅に同行した。

高木兼寛は海軍で親交があり、すでにロンドンに帰国していた英国人医師ウィリアム・アンダーソンに二人の看護婦留学生を依頼していた。高木はアンダーソンには派遣の目的はセント・トマス病院の看護制度の日本への採用であると伝えていた。ところが航海の途中でハリソン夫人が死亡し、そのためセント・トマス病院では二人の人物証明書がなく、見習生としての受け入れが難航した。ナイチンゲール学校の卒業生名簿に二人の名前がないことから、彼女たちはセント・トマス病院に研修生という形で受け入れられ、留学生活を送ったものと推察される。

拝志ヨシネと那須セイは二年間の留学生活を終え、一八八九年一一月二二日無事帰国した。帰国後の二人は大きく抜擢され、看護婦教育所で生徒教育掛として活躍した。

(三) 看護教科書の編纂、看護書の校閲、家庭衛生書の出版

①東京慈恵医院看護婦教育所の看護教科書『東京慈恵医院看護学』の編纂

アメリカの看護教科書『ハンドブック・オブ・ナーシング』を翻訳編集し『東京慈恵医院看護学』として明治20年から看護婦教育所の看護教科書として使用した[28]。『ハンドブック・オブ・ナーシング』（A hand-book of nursing for family and general use）はアメリカニューヘブン病院コネチカット看

護学校委員会の編纂による看護教科書で、一八八〇年にロンドンのリッピンコット社から刊行されたものである。本書は高木兼寛の蔵書で、一八八〇年留学からの帰国時にロンドンから持ち帰ったものである。

図四　『東京慈恵医院看護学』（明治二〇年頃）
（著者所蔵）。

ている。本書は傷病応急手当法講義五回（七七頁）、附録一般家庭衛生講義が四回（八三頁）、附録看病法一回（二六頁）で全一〇回の講義内容の講述録である。東京府教育会発行、発売は博報堂書店で定価は三五銭となっている。

看病法の内容は看病婦の効能、家族の看病の心得、主治医、容態説明、診察の受け方、病室、飲食物、薬の用法、安静、伝染病患者、消毒法脈呼吸体温の測定、皮膚の清潔、吸入、灌腸、転地療養、温泉、海水浴、山などとなっている。

東京府教育会は明治一六年に発足、趣旨は東京府下の教育を官民併せて改良進歩を図っていこうとするものである。事業として教育に関する図書出版、教育に関する建議、幼稚園保母講習所、小学校教員速成伝習所、家事専科教員伝習所、英語教員伝習所などの設立運営を行っている[30]。高木は晩年、東京市教育会の会長（大正六～九年）をしている[31]。東京府教育会は戦後は東京都教育会と改称し現在に至っている。

②高木兼寛閲、三好常三郎著『傷病応急手当法講義』東京府教育会（明治三七年）

国立国会図書館の蔵書目録では、高木兼寛の看護書として『傷病応急手当法講義』（明治三七年）[29]が検索されるが、これは東大医学士三好常三郎が東京府教育会で教師を対象に講述したものを高木が校閲したものとなっている。本書の表紙にはタイトルのつぎに「附一般家庭衛生　看病法」と記され

③高木兼寛著『家庭衛生及び治病』（大正四年刊）[32]

本書は高木による家庭衛生書である。表紙には医学博士男爵高木兼寛先生述となっており、編者言に「本書は医学博士男爵高木兼寛先生に請ふて、一般家庭に於いて実行の容易なる衛生萬般に就きて其の講述を編纂したるもの也」という記述がみえる。巻頭言には「夫れ衛生の事は、吾人其身体の安全を期し、生存を保ちて天寿を完ふせんとする上に於て、能

く実行せざるべからざる事なり。然るに世人は衛生の事を知りて行はざるあり、知らずして行はざるありて、然も之れが為に疾病に罹る者多き現状也。本書主として家庭に於て実行簡易なる健康衛生と、疾病注意を掲げて一般家庭の参考に資する所あらんとす」と述べられている。

目次は第一編健康衛生、第二編疾病注意法の大きく二つから構成されている。全二九四頁である。前者にはさらに、体力増進を計るの道、健康保全上改良すべき諸点、食物衛生法、疾病予防法、此点を実行せよ、帽子全廃奨励、娯楽と実益と衛生、生活の根本軌道先づ此点が肝要なり、大に奨励すべき一事、余が実験の子女養育法、六根清浄、師弟教育論、精神衛生法心は斯く持て、の項目で、後者は、一般患者に告ぐ、内科に関する病気の注意、外科に関する病気、耳鼻咽喉病の注意、小児病の注意、精神病の注意、眼病の注意、胃腸病の注意、婦人病の注意、皮膚病の注意、妊娠中の注意、盲腸炎の注意、神経病と神経質、海水浴の注意の項目でそれぞれ構成され、これらの項目の下にさらにその内容を示す小見出しが掲載されていてその内容がわかるようになっている。

衛生については「衣食住の三者一として衛生を根元として居らないものはないのである。即ち吾々人間が生活するには衛生を度外にしては一日も生活する事が出来ない」とその重要性を述べ「小児病の注意」の「看護の注意」では「小児の病気は薬餌よりも看護が大切である」とし看護の効能を認識している[33]。

（四）大正四年内務省令「看護婦規則」制定委員会委員長に就任

看護婦の認可は従来府県に任され、資格取得の条件も各府県により多少まちまちであったが看護婦の需要の増大に伴い、規制を統一し、学識・技術の不均衡を是正し、同時に免許の効力を全国共通とし、さらに地方長官の指定した学校・養成所の出身者には無試験で免状を下付する特典を制度化することを狙いとした看護婦規則案が内務省から中央衛生会に諮問され、大正四年一月二一日の定例会議にかけられ、委員委託となった。調査委員には高木兼寛・中川望・森林太郎、木村（某）・中浜東一郎・金杉英五郎・山田（某）・野田忠広、栗本庸勝が当たり、三月一八日の定例日に委員長高木兼寛から報告があって可決された。本案は大正四年六月三〇日内務省令第九号看護婦規則として公布になり、一〇月一日から実施された。また本規則第二条第一項第二号の看護婦学校及び同講習所指定基準に関する訓令案も七月一日の中央衛生会で可決された[34]。

五、結語

黎明期の日本において東京で活躍した二人の軍医、田代基徳（一八三九年生）、高木兼寛（一八四九年生）には、陸軍、海軍という所属の違いはあるが、いくつかの共通点がある。

田代は高木より一〇歳年上であるが二人の軍医は、ほぼ同時代を生きた。

田代に関する看護史の論文をまとめているときに、高木が田代の資料によくでてくることに気が付いた。高木はわが国で最初の看護教育施設を創設し近代看護教育の導入に尽力した人物として有名であるが、高木よりも先に田代は近代看護学に注目し明治最初の翻訳看護書を出版しており、二人は近代看護学の導入という点では明治期における両雄である。

近代看護学導入という点のほかに両者には同じ「九州出身」という共通点があった。田代は豊前、高木は薩摩の出身である。しかし田代は旧幕府側の教育機関の教員であり、高木は新政府軍の軍医という違いはあった。そのほかには西洋医学を学んでいること、特に英国人医師ウィリスは二人が共通に学んだ英国医学の教師である。高木が英国留学から帰国後に東京に創設した医学研究会「成医会」の結成に田代が四人の重要な会の幹事の一人として、松山棟庵をはじめとする慶應義塾関係者（福沢諭吉関連）の一員として参加していることは両者の関係を親密なものとしたと考えられる。成医会の例会記事は田代の『医学雑誌』にも掲載された。高木は田代の私的医学塾である医学院の教師となり、田代の病体解剖社で病理解剖を行っている。近代看護学の導入に尽力した二人に交流があったことはこれまであまり知られていなかった。

九州は古代から大陸との交流があり、江戸時代には、対外関係の窓口となった「四つの口（松前・対馬・長崎・薩摩）」のうち、三つを有した。なかでも中国（明・清）とオランダを扱った天領の長崎口は、西洋文化の唯一の窓口といわれている。九州には異文化交流・異文化受容の地域力がある[35]。田代と高木はともにこの九州という磁場で育っている。近代日本の黎明期といえる明治初期に、近代看護学の導入という側面において、田代基徳と高木兼寛という九州出身の２人の医師が開拓の志を有し、看護史上に大きな功績を残した。

【引用文献及び註】

1 平尾真智子「明治最初の翻訳看護書の原著解明と看護史上の意義 ―田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』（明治七年）、」『日本医史学雑誌』、五九巻三号、三九一～四〇五頁、二〇一三年。

2 川嶌眞人「田代基徳 ―明治初期の医学教育界・軍医界で活躍した外科医」、ヴォルフガング・ミヒェル他編『九州の蘭学 ― 越境と交流』三三九～三四四頁、思文閣出版、二〇〇九年。

3 平尾、前掲書一、に同じ。

4 平尾、前掲書一、に同じ。

5 アドルフ・ワイル著、田代基徳撰・有持番纂訳・大橋和太郎校訂『打診図譜（准児氏）』、島村利助、明治一三

6 『全三二図』、本文二三頁、国会図書館蔵。本資料はデジタル化されインターネット公開されている。

7 平尾、前掲書一、に同じ。

8 『医事新聞』（明治二一年）にみる足立寛による「看護法」はつぎの六つの号に連載されている。足立寛「看護法」、『医事新聞』、第二六七号、三～一二頁、シリーズの最初には田代による序文が掲載されている。内容は病者看侍、病室及臥床就褥及換褥、病室温度。第二六八号、二九～三三頁、内容は浴法。第二六九号、三三～四二頁、内容は消毒法、病者飲食、体温及其測定法。第二七〇号、二八～三六頁、内容は発汗介補、上圊介補、放尿介補、瀕死及死後所置。第二七二号、三五～四六頁、内容は薬物用法、吸入法、点眼法、注入法及潅注法、浣腸法、乾性温暖法、罨法、擦剤用法、塗薬用法、水蛭用法、吸角用法、芥子泥用法。第二七四号、三九～四四頁、内容は伝染病、弟扶斯、痢病、虎列刺。『医事新聞』には田代の私塾「医学院」の医学各科の記事が掲載されるが、この看護法は「衛生部」のタイトル下に掲載されている。この時代看護法はまだ医学の独立した一分野となっておらず、衛生部のなかに包含されていた。

9 足立寛（一八四二～一九一七）、遠江国出身。福澤諭吉に蘭学を学んだ後に適塾に入門、緒方洪庵を追って西洋医学所、医学所に学ぶ。明治八年陸軍二等軍医正、同一七年陸軍二等軍医正兼東京大学教授、一九年陸軍軍医学舎教官となり軍陣外科学を講義、二〇年日本赤十字社篤志看護婦人会を興し、その講師となる。多数の医書を刊行しているが、『日本赤十字社篤志看護婦人会教程』は数回出版し、看護教育に貢献した。土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』、一九七三年。適塾門下生番号は六〇七番である。

10 平尾、前掲書一、に同じ。

11 松田誠『高木兼寛の医学 ― 東京慈恵会医科大学の源流』、東京慈恵会医科大学、二〇〇七年。

12 松田誠、前掲書一〇、に同じ。

13 大山瑞代訳『幕末維新を駆け抜けた英国人医師 ― 甦る「ウィリアム・ウィリス文書」』、創泉堂出版、二〇〇三年。ウィリアム・ウィリス略年表が付されている。

14 『医事新聞』にみる成医会の記事は明治一四（一八八一）年と一五（一八八二）年の号に記載されている。成医会『医事新聞』（明治一四年）の第三六号、第三七号、第三九号、第四〇号、第四一号、第四二号、『医事新聞』（明治一五年）の第四八号。

15 高木兼寛「腹水論」、『医事新聞』、第三六号、第三七号、明治一四（一八八一）年。

16 高木兼寛「腸管閉塞」、『医事新聞』、第三九号、明治一四（一八八一）年。

17 高木兼寛「黄疸論」、『医事新聞』、第四二号、第四四号、

17 第四五号、明治一四（一八八一）年。
松田誠『脚気をなくした男 ― 高木兼寛伝』、一三二頁、講談社、一九九〇年。

18 病体解剖社、慢性気管支炎病体解記事、高木兼寛講述、『医事新聞』、第四〇号、明治一四（一八八一）年。病体解剖社については、『石出猛史』、病体解剖社、千葉医学、七八、七～一四頁、二〇〇二年が参考になる。

19 「教員追加、『医事新聞』、第四〇号、二九頁、明治一四（一八八一）年。

20 付録医学院姓名録（明治一五年一月改正）、『医事新聞』、第四八号、附録五頁、明治一五（一八八二）年。

21 「雑報　看護婦卒業、『医事新聞』、第二八五号、二三～二四頁、明治二一（一八八八）年。

22 松田誠『脚気をなくした男 ― 高木兼寛伝』、講談社、一九九〇年。

23 松田誠、前掲書一〇、に同じ。全一一〇〇頁。

24 慈恵看護教育百年史編集委員会編『慈恵看護教育百年史』、東京慈恵会、一九八四年。

25 平尾真智子「ウィリアム・アンダーソンと東京慈恵医院看護婦教育所の看護婦留学生について」、『医譚』、六〇号、一一～一八頁、一九九一年。

26 芳賀佐和子、住吉蝶子、平尾真智子「日本で最初の看護婦留学生とセント・トマス病院」、『日本医史学雑誌』、五〇（一）、二八～二九頁、二〇〇四年。

27 拝志よしね（一八六六～一八九二）。伊予（愛媛県）出身。明治二〇年に安達憲忠と結婚、彼女は二〇歳で看護婦教育所の学生であった。安達はのちに東京府養育院の運営に尽力し社会福祉の先駆者となる。よしねは新婚早々に留学を命じられてロンドンに赴いた。帰国後は東京慈恵医院で男室看護長兼手術室掛などをつとめたが、明治二五年結核で二七歳で死亡した。結婚生活は五年、留学期間を除くと実質二年で、よしねは草創期の東京慈恵医院に勤務し、多忙な日々をおくった。父の林豊旗（旧伊予大洲藩士元愛媛県小参事）は宮内省の主馬寮に勤めたこともある。彼の出身地には拝志という名前があるが、東京では林を名乗っている。拝志よしねの別名に林徽音がある。

28 平尾真智子・坪井良子、和装毛筆書『東京慈恵医院看護学』とアメリカ初期の看護教科書『ハンドブック・オブ・ナーシング』、日本看護歴史学会第二七回学術集会講演集、二七～二八頁、二〇一三年。

29 高木兼寛閲、三好常三郎著『傷病応急手当法講義』、東京府教育会、明治三七（一九〇四）年。

30 「東京府教育会」については、東京都立教育研究所編『東京都教育史　通史編1』東京都立教育研究所、一九九四年。に変遷や活動内容などの記載がある。

31 東京都教育会『東京都教育会六十年史』、東京都教育会、一九四三年。第三編東京市教育会沿革　第三章高木会長

時代、四六五〜五一〇頁。

32 高木兼寛『家庭衛生及び治病：簡易実用』、大学館、大正四（一九一五）年。

33 蝦名總子、平尾真智子、芳賀佐和子「『家庭衛生及び治病』（大正四年刊）にみる高木兼寛の医療観」、『日本医史学雑誌』、五八巻二号、一八五ページ、二〇一二年。

34 駒込病院百年史編纂委員会『駒込病院百年史』駒込病院、一九八三年、二八九〜二九九頁。第二章「病院の変遷」、二九大正四年／「看護婦規則の制定」、参照。また、亀山美知子『近代日本看護史Ⅳ（看護婦と医師）』、ドメス出版、一九八五年、二四六頁、には、「中央衛生会に於ける看護婦規則案」、『東京医事新誌』、一九〇六号、（大正四年一月三〇日）を引用し、大正四年一月になり、中央衛生会にして内務省から看護婦規則案が諮問された。中央衛生会ではこれを受けて委員委託となった。調査委員には高木兼寛、中川望衛生局長、金杉英五郎ら九名が選定され、二月から取り組むこととなった。という記述がある。

35 ヴォルフガング・ミヒェル他編『九州の蘭学―越境と交流』、思文閣出版、二〇〇九年。

中津の医家田渕家蔵「醫療歌配劑秘本」写本について

大島　明秀

要旨

本稿では中津の医家田渕家に所蔵されていた「醫療歌配劑秘本」写本を分析した。まず筆跡から検討した結果、田渕家初代元養の師であった久恆元的が書写したものであることが判明した。次に「醫療歌配劑秘本」は、一七七二年に刊行された古林見桃『捷徑醫療歌配劑』を底本として作成された資料でありながら、「秘本」という言葉にもあるように、所々で写本作成者が独自に手を加えたものであったことも明らかになった。書写者の久恆元的はこれまで経歴不詳の人物であったが、江戸の官医渋江松軒に遡る医学の門流に位置づけられること、中津藩医三輪東菴に師事したこと、豊後日出藩の儒者原田東岳や江戸の漢学者江村北海にも学んだこと、初編が一八〇九年に刊行された『腹証奇覧翼』の校訂者である原田蘭洲を第三子に持つこと、さらに内科を専門とする町医でありながらも藩の仕事にも従事した、いわば「御用町医」の筆頭的存在であったことなどが初めて明らかになった。

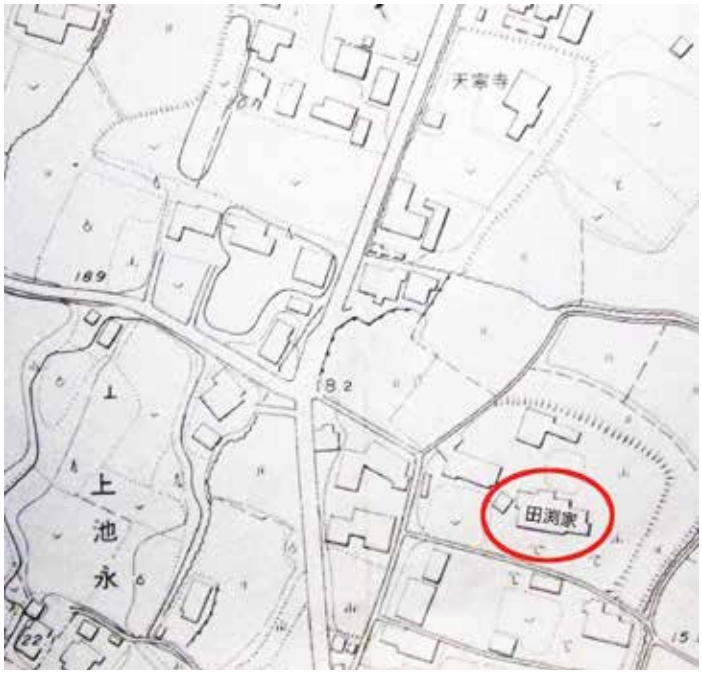
キーワード

田渕家、久恆元的、醫療歌配劑秘本、古林見桃、捷徑醫療歌配劑、町医、道歌、本草和歌

はじめに

中津市上池永に所在する田渕家は、初代元養を祖とした十八世紀中葉に遡る医家である（図一）。平成二三年に同家から歴史民俗資料館に寄託された資料群は、文書、版本、写本、軸をはじめとして三百点前後にわたる。

目下、田渕家についてはほとんど未解明の状態の中、本稿では、同家資料のうち「醫療歌配劑秘本」写本（図二）に焦点を当て、その書誌情報、著者、典拠、ならびに資料的位置づけを行いながら、周辺事項についても探っていく。



図一　田渕家の周辺地図。丸で囲んだ所が同家
（縮尺一五〇〇分の一）。

図二　「醫療歌配劑秘本」より。「丹溪」や「張路玉」との角書が見える
（中津市歴史民俗資料館蔵）。

図三　「田渕宗古主」との墨書

一、書誌情報

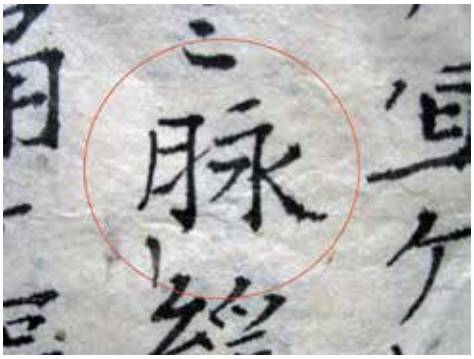
「醫療歌配劑秘本」は、楮紙十枚を袋状にし、最初を表紙、最後を裏表紙として使用し、六つ目綴じにした写本である[2]。内題や奥書は不在で、外題は「不許他見　醫療歌配劑秘本」と墨書で打ち付けられている。裏表紙には「田渕宗古主」と記され、間違いなく田渕家の所蔵であったことが裏付けられる（図三）。

題名の「歌」という表現が示すように、本文は症候を主とした項目名を部立として九四首の和歌のみで構成されている。これは、中医学的な観点に基づく様々な症候とそれに対する配剤を、利用者の暗記暗唱用に和歌形式（五・七・五・七・七）で記したものである。また、和歌の冒頭部分には角書形式で「配剤」（あるいは同）という文言が認められるが、時折典拠名が添えられていることもある。

本資料の筆写者については奥書が不在であることからただちには分からないが、筆跡を手掛かりに追究してみることとする。「醫療歌配劑秘本」の字は平たく、一字一字をはっきり記す点が特徴的である。また、「シ」や「氣」をはじめとした各字の最後のはらいが伸びやかであることも目に付く。これらの特徴点をもとに同一筆跡の資料を捜索すると、田渕家蔵写本「山本流外科秘傳書」[3]に辿り着いた。

例えば、「醫療歌配劑秘本」本文と「山本流外科秘傳書」叙の「脉」という字を比較すると[4]、その字形や全体のバランス、「永」の縦線に入る前の横線の長さや右肩上がりの角度、

図五　「山本流外科書」の「脉」



図四　「醫療歌配劑秘本」の「脉」

図六　「山本流外科秘傳書」叙の冒頭
（中津市歴史民俗資料館蔵）。

はらいの角度と長さ、さらにはにくづきの二本目の横線が右上に向かってはらわれていることなど、両者が同一筆跡であることはもはや論を俟たない（図四、五）。

さて、「山本流外科書」叙の年記・署名には、「寛政十［一七九八］歳枉戊午孟春／豐府　中津　久恆秀堅元的識[5]」とある。したがって、「醫療歌配劑秘本」は、少なくとも久恆元的が書写し、その後田渕家が入手した資料と見ることができる。

二、久恆秀堅元的について

前に掲げた久恆元的が記した「山本流外科秘傳書」叙に、元的と田渕家の関係を示す文章が確認できる（図六）。以下、引用する。

外科傳書ハ／者、或人秘ス之帳中ニ、門人元養ナル者ノ請テ得レタリ、之ヲ以携ヘ來リ、謂レ余ニ曰ク、此ノ／書外科治療之活手段而、實可味之書ナリ也惜ヒカナ乎、舊ト所傳／寫スル、文字多ク焉馬、次序有錯亂、視者憾ム焉請劉覽シテ之以訂／正セハ其ノ差謬ヲ、則小子輩之幸ナランカ也歟[6]

ここで元的は、田渕元養が「山本流外科秘傳書」写本を持ち込んだ経緯について述べているが、注目すべきは元的が元養を「門人」と明記していることである。元的写「醫療歌配劑秘本」が田渕家に蔵されていた背景には、元的と元養が師弟関係であったことが所在する。

ときに、田渕家蔵写本「括秘録」[7]は、その冒頭に、江戸の医官渋江松軒を祖とする門流の人物略伝「括秘録附牒小傳記」を備えている（図七）。ここに言及されている松軒とは、法印の位を授けられた後、奥医師に叙せられた渋江直治（一六五一～一七三五）に間違いない[8]。

松軒に続いては、その教えを受け、中津小笠原侯（のち小倉侯）の侍医をつとめた土屋藍洲昌英、さらには藍洲の弟子で中津奥平侯に仕えた藩医三輪東菴親民、最後に東菴に学んだ元的の計四名の略伝が収録されている。ここで元的に関わる記述を見てみよう。

△久恆元的　姓久恆氏、名秀賢、字子頴、一字元的、其先出自藤／原淡海公、公之後裔、淡海公三十六世孫有久恆右衛門尉者、即其後也、／右衛門尉七世孫受業東庵先生、肄業有年、因續其姓為三輪者、此／乃先生之所命也、又受學同府秀堅本之中津人豊東岳先生、及京師／北海先生、性好詩、其詩見于日本詩選、續編[9]

略伝によると、元的は三輪東菴のもとで数年医業を修め、東庵の意向で三輪姓を継いだようである。その他、豊後日出藩の儒者原田東岳（一七〇九～八三）[10]や、『日本詩選』など数々の漢詩文を著したことで周知される京都の漢学者江村北海（一七一三～八八）に教えを受けたとされる。

図七　「括秘録附牒小傳記」の冒頭
（中津市歴史民俗資料館蔵）。

ところで、『群誌後材　扇城遺聞』には、和久田叔虎『腹証奇覧翼』（初編文化六［一八〇九］年）の校訂者として知られる中津藩の学者原田蘭洲成憲の墓碑（書き下し文）が掲載されており、その冒頭に元的（元迪）の名が登場する。

原田君諱は政憲、字子欣、蘭洲と号し、養賢と称す。家世々医を業とす。皇考久恒元迪と称す先生、少にして原田東岳に従うて学び、嶄然成る有り。博く古今の事実及野史小説之縁故に通じ、時人以て哲と為す。其人となり、行状の美往に瀬川先生墓碑を撰びて尽せり。君は実は元迪の三子なり[11]

墓碑によれば、元的は「博く古今の事実及野史小説之縁故に通じ」ていた人物で、同時代の人々に「哲」者と眼差された。何より興味深いのは、原田蘭洲は久恒元的の第三子であると記されていることである。

ここで中津藩政史料である「市令録」を用いて、さらに元的の動向を探ってみよう。「市令録」巻之二には「浪人医師并借宅之武家同家来分」が収録されており、そこに元的（元迪）の名が複数確認できる[12]。例えば、寛政元（一七八九）年の「町医御用相勤候人頭」では「内治」医の筆頭に登場する[13]。同様に、文化八（一八一二）年九月の改めでも、「町医」項の「内治」医の第一番目にその名が挙がっている[14]。

また、仕事上の活躍を示す記述も見える。天明八（一七八八）年八月四日に起こった「川向羽根御普請之節、在夫助部村勇吉溺死一件」では「内」治医として出役をつとめ、後に「金百疋」を拝領している[15]。同様に、寛政元年四月五日の「生山組二日市村半左衛門娘山犬ニ被咬候節」も「本道」医として出役をつとめ、閏六月に「金貳百疋」を拝領している[16]。続いて享和三（一八〇三）年八月、中津領佐野村の者と時枝領猿渡村の者が喧嘩し、佐野村側に怪我人が出た際も、代官原岡孫八郎の命を受けて医師として出向した[17]。文政九（一八二六）年五月にも「金拾五両」と「銀札拾貫目」を拝

領しているが、この時元的は新魚町に居住していた[18]。

以上が「市令録」に見える記録である。なお、寛政二（一七九〇）年六月の記録をはじめとして本道医師「久恒元篤」という名も時折認められたが[19]、元的との関係は不明である。また、元的が「三輪姓」を名乗った様子も認められなかった。いずれにせよ、ここまでの考証で、久恒元的が田渕家初代元養の師であること、その元的は三輪東庵に医を学んだこと、『腹証奇覧翼』の校訂者原田蘭洲の実父であること、ならびに「本道」を業とした「町医」でありながらもたびたび藩の「御用」に従事していた、中津藩における、いわば「御用町医」の筆頭的存在であることなど様々な事実が明らかになった。

三、「食物本草和歌」と「醫療歌配劑秘本」写本の典拠

一般に教育のための詩歌は中国では歌訣、日本では道歌といい、特に本草関係の内容を伝える和歌を「食物本草和歌」と呼ぶ。中国の本草関係の歌訣は、元代の『本草謌括』（一二九五刊）に遡ることができる。本書は宋代の『証類本草』を七言絶句にまとめたもので、真柳誠は、明・清期に大流行した諸薬性歌の先駆けであると指摘している[20]。また、明代に編纂され、日中の本草学に多大な影響を及ぼした『本草綱目』（一七五八刊）では、『本草謌括』が初学者用の暗記に活用されたことが述べられている。

元瑞州路醫學教授胡仕可。取本草藥性圖形作謌。以便童蒙者。我明劉純熊宗立傳滋輩。皆有謌括及藥性賦。以授初學記誦。（元の瑞州路醫學教授・胡仕可は本草の藥性・圖形を取りて謌を作る。以て童蒙者の便とす。我明の劉純、熊宗立は輩を傳滋するに、皆謌括及び藥性賦有り。以て初學に記誦を授く。）[21]

このように中国では歌訣をもって本草や医学の教育を進めていたが、日本においても中世後期の名医曲直瀬道三（一五〇七～九四）の「切紙」を輯めて刊行された版本『切紙』に、七字区形式の漢詩「禁灸歌」が掲載されるなど、かかる教育方法は積極的に取り入れられていた[22]。

一方で、古来日本では和歌で教訓を伝える教育方法もまた存在しており、中近世においても盛んに行われていたようだ[23]。かかる流れの中で「食物本草和歌」が成立したものと推察されるが、近世初期には、最も著名かつ流布した本の一つである『和歌食物本草』が上梓される。目下のところ、寛永七（一六三〇）年版、同一〇年版、正保三年（一六四六）版、承応三（一六五四）年版、寛文一一（一六七一）年版、元禄五（一六九二）年版、さらには同七年版が確認でき、書籍の広がりと、「本草和歌」が浸透している様子が想定できる[24]。

さて、久恒元的が写した「醫療歌配劑秘本」は、明和九（一七七二）年に漢方医古林見桃によって上梓された『捷徑

醫療歌配剤』巻之上を典拠としている。ただし、『捷徑醫療歌配剤』の本文は和歌だけではない。様々な症候とその処方を記した後に、その内容を含んだ和歌を添えている。和歌は、まず丸印を頭に付して症候に関する歌を一首示した上で、次に「配剤」と角書した処方に関する歌が詠まれる。

なお、元的の筆写本では「配剤」ではない角書が五種見られる。「丹溪」、「張路玉」、「治痢經験」、「朱陵」、そして「茶談意」である。まず前二者であるが、版本『捷徑醫療歌配剤』において、元の医師朱丹溪の著書を典拠とした部分については、本文で「丹溪意」と記し、その直後に「配剤」と角書を有した和歌「血虚ニハ四物湯コソ宜シケレ気虚ハ四君子ト心得テヲケ」を寄せている。写本では、本文ではなく同歌の角書に「丹溪」と付しており、ここに書写の過程での工夫が見える。

同様に、典拠で本文に「張氏医通意」とあり、その直後に丸印を頭に備えた和歌「右左分タズ治セヨ一木ナル梢枯ルヲ見ルニツケテモ」が寄せられている箇所がある。写本の同歌の頭には、丸印ではなく「張路玉」と角書が付されている。「医通」という書名は落とされ、「張氏」とのみあった名前は、姓だけではなく名まで明記されている。

問題は残り三種の角書である。写本で「治痢經験」との角書を有した和歌「小兒ノ痢附子理中湯ニ肉桂ト茯苓大棗加テソモル」は、『捷徑醫療歌配剤』には認められない。「治痢經験」は、加藤玄順（一六九九～一七八五）によって延享五（一七四八）年に刊行された痢病の治療書である。久恆元的が挿入したのか、それとも元的が底本とした写本があり、既にそこに加えられていたのかは定かでないが、ここにも筆写の過程での工夫が見える。

残る「朱陵」については、これを角書に持つ和歌「熱アラハ柴平湯ヨ熱ナキ積ニハ七氣湯ト知ヘシ」は、版本『捷徑醫療歌配剤』には認められない。六丁裏から七丁表にかけて、症候の代わりに「追加　朱陵」と項目を立て、さらに九首が寄せられている。角書には「茶談意」とあり、「茶談」という書物からの典拠であることが示唆されている。「茶談」という言辞から想起される津田玄仙『療治茶談』（明和七［一七七〇］年初編刊）には、写本で示された内容に適合する箇所が見当たらない。以上を総合すると、「朱陵」は久恆元的自身か、近しい人物の可能性が考えられるが、現時点では「茶談」とともに不明と言わざるを得ない。また、写本の末尾部分の項目「△灸」の四首と項目「刺禁」の七首は角書が不在であり、当該部分の典拠が不詳である。これらを突き止めることも今後の課題である。

いずれにせよ、元的が筆写した「醫療歌配剤秘本」写本が、版行された『捷徑醫療歌配剤』の部分的な写本に過ぎなければ「秘本」と名乗る必要は無い。換言すれば、「治痢經験」、「朱陵」或いは「茶談」を典拠とした写本独自の内容を挿入していることが、写本作成者をして「秘本」と命名せしめた所以であろう。

おわりに

筆跡から検討した結果、中津の医家田渕家に所蔵されていた「醫療歌配劑秘本」写本は、田渕家初代元養の師であった久恆秀堅元的が書写したものであることが判明した。「醫療歌配劑秘本」は、古林見桃『捷徑醫療歌配剤』を底本として作成された資料でありながら、「秘本」という言葉にもあるように、所々で写本作成者が独自に手を加えたものであった。

なお、書写者の久恆元的はこれまで経歴不詳の人物であったが、本稿により、渋江松軒に遡る医学の門流に位置づけられること、直接には三輪東菴に師事したこと、原田東岳や江村北海にも学んだこと、「博く古今の事実及野史小説之縁故に通じ」ており「時人以て哲と」評価されていたこと、『腹証奇覧翼』の校訂者である原田蘭洲を第三子に持つこと、さらに内治を専門とする町医でありながらも藩の仕事にも従事した、いわば「御用町医」の筆頭的存在であったことなどが、ここに初めて明らかになった。

以上、「醫療歌配劑秘本」の分析を通じて辿り着いた久恆元的は、経歴においても学問においても一定の存在感を示した人物であった。かかる元的については、その門弟であった田渕元養も含め、中津医学史および中津藩史を描きなおす上で、さらに究明すべき課題である。

【史料】「醫療歌配劑秘本」

【原文】

［表紙］

醫療歌配劑秘本（不許他見）

［見返し］

素問瘧論篇三十五岐伯ノ曰經ニ言無シ刺スルコトニ熇々之熱ヲ無レ刺スコトニ渾々ノ之脉ヲ無レ刺スコトニ漉々之汗ヲ故ニ為スハ其病ヒ逆スルコト未レ可レ治也

註云熇々盛熱ナリ也渾々ハ言レ無ヲ端緒ヲ也漉々ハ言ヲ汗大ニ出ヲ也

［一丁表］

傷寒

陰病ニ陽脉鼓ハ宜ケレ陽ニ陰コソ危カリケレ

汗出テ風ヲバ悪ミ脉緩キ此傷風ト預メ知レ

悪寒アリ身中痛テ嘔逆シ寸尺トモニ緊ハ傷寒

汗無クハ麻黄湯ニテ汗ヲサセ汗アルモノハ桂枝湯ナリ（剤配）

傷風ハ桂枝葛根参穐飲敗毒散ニ九味ノ羌活（剤配）

傷寒ハ麻黄青龍小柴胡白虎承氣ニ四逆湯ナリ（剤配）

風毒　脚氣

［一丁裏］

風毒ハ先脚ヨリソ起ルナリ腫ル不レ腫ハ人ニヨルベシ

脚氣ニハ足ニ弱ナルヲ風トナシ疼ミツヨキヲ濕ト知ルベシ

剤配 脚氣ニハ防已越婢ニ茱萸湯ヨ半夏湯又槟蘇ナトヨシ

黄疸

黄疸ハ濕熱ヨリソ得ルナレハ汗サシ二便通シテゾヨキ

剤配 黄疸ハ茵蔯湯ニ五苓散梔子大黄ヲ用テゾヨキ

［二丁表］

水腫 禁針

人ノ面腫ルハ風ヨ足ニ脛ノ腫ヲハ水ト心ニ得テヨシ

按テ見テ痕ノツクノハ濕ノ腫レ痕平ラカハ氣ニノ腫ト知ル

腫氣ナラバ上ニアルノハ汗ヲサセ下ニアルノハ小便ニ脱ケ

剤配 浮腫ノ症五苓越婢ニ赤小豆分心氣飲三和散ナリ

浮腫ノ症痰咳アリテ腹中ノ動氣強ハ死症也ケリ

水腫病一ニ處破レテ水出ルハ悪症ナリト兼テ知ルベシ

食傷

脾胃ハ磨旋レハ無病停ハ導キ下セ吐サセテヨシ

剤配 食滞ハ平胃不換ニ承氣湯大黄備急時ニヨルベシ

泄瀉　痢疾

［二丁裏］

泄五ツ大瘕泄コソ痢病ナレ裏急後重氣ヲハ和スヘシ

剤配 泄瀉セハ白朮散ニ胃苓湯痢ニハ芍藥玉燭モヨシ

治痢経験 小兒ノ痢附子理中湯ニ肉桂ト茯苓大棗加テソモル

痢ノ脉ハ微小滑大ナル吉浮洪弦急ハアシキ也ケリ

中風

中風ハ氣ヨリ生スルモノナレト間外邪ニモ中風ハアル

左リ陰血虚トスレハ右ハ陽氣虚ト心得匙ヲ取ルベシ

剤配 中風ハ三生飲ニ附子理中烏藥順氣ニ續命ヲモレ

剤配 風熱ノ中風ナラハ通聖散氣虚ニハ補中益氣湯ナリ

溪丹 血虚ニハ四物湯コソ宜シケレ氣虚ハ四君子ト心得テヲケ

張玉路 右ニ左分タズ治セヨ一ニ木ナル梢枯ルヲ見ルニツケテモ

［三丁表］

積聚

積ハ陰痛ミ動カズ聚ハ陽ヨ散リ聚リツ痛ミ常ナシ

剤配 積聚ニハ大七氣湯四七湯潰堅湯ニ香蘇散ナリ

陵朱 熱アラハ柴平湯ヨ熱ナキ積ニハ七氣湯ト知ヘシ

血症

陽氣ノミ大ニ怒リ鬱スレハ血コソ溢レテ湧出ルナレ

剤配 吐血ニハ犀肉地黄皈脾湯ニ大黄瀉心宜シカルヘシ

燈ノ光リ消ヘントスル時ハ先ツ挑テ○油サスナリ ○獨参湯 ○四物湯

失血ニ脉小弱ハ宜シケレ實大ナルハ危ト知レ

［三丁裏］

瘧

夏ノ暑ニ傷レテコソ秋ニナリ必瘧病ト云ナレ

剤配 瘧ナラハ清脾柴平養胃湯截ルハ遅クテ七寶ヲモレ

瘧ノ脉弦数ナルハ熱多シ弦遅ナルノハ寒多キ也

咳嗽

咳嗽ハ唯リ肺ノミニ限ラジナ五臓六腑(モ)アルモノソカシ

剤配 咳ナラバ瀉白三拗二陳湯瓜蔞枳實ニ蘇子降気湯

咳嗽ニ脉ノ浮濇ハ宜キニ伏沉ナルハ悪キ也ケリ

虚

[四丁表]

補ヒニ重キ薬ハ泥ムベシ軽クアシライ脾胃ヲ助ケヨ

剤配 氣虚ナラバ補中益氣ニ六君子黄芪建中大補湯也

血虚ニハ金匱腎氣ニ六味丸四物八珍補心湯也

眩暈

風ノ木ニアタル姿ヲ人ノ身ノ眩暈病ル譬ナリケリ

剤配 眩暈ハ半夏白朮天麻湯清暈化疼用ヘキ也

喉痺

[四丁裏]

肝膽ノ一陰陽カ結レテ喉塞レハ喉痺ドソナル

剤配 喉脾ニハ通關散ヤ一方ニ甘草桔梗荊芥モヨシ

癲狂

陽ニ陽重ル者ハ狂氣(キチカイ)ヨ陰ニ陰コソ癲癇ト知レ

剤配 狂癲ハ逍遥散ニ控涎(コウゼン)丹竹茹温膽計ヒニセヨ

陽氣折レ欝結散ラヌ其人ハ必狂氣スルト知ヘシ

剤配 怒狂ニハ朱砂安神ヤ大柴胡鐵落ノ類用ユヘキ也

犬傷

[五丁表]

風犬ニ咬レ傷フ人アラハ麻(アサ)小豆ナト百日ハ忌

剤配 犬陽ハ救生散ヤ大承氣黄連鮮毒牽牛杏仁

呃逆【呃逆ニ脉浮緩ナハヨケレトモ弦急ナルハ死ス

ト知ヘシ】

剤配 手足冷ヘ脉沉細ハ寒呃(キツ)ヨ丁香梯蔕用テソヨキ

剤配 發熱シ脉數ニシテ煩渇ハ熱呃ナラハ小柴胡ヨシ

呕吐ニハ脉ノ虚細ハ宜キニ実大ナルハ危ト知レ

膈噎

[五丁裏]

三陽ノ熱結レテ下行セズ津液スデニ涸(カル)ル膈噎

剤配 膈噎ハ瓜蔞枳實ニ二陳湯順氣和中ヤ流氣飲ナリ

中暑

暑キ日ニ中ラレテコソ中暑ナレ陰ト陽トノ名ニハ惑(フ)ナ

剤配 中暑ニハ益元散ニ香薷飲白虎生脉五苓散也

便毒

剤配 濕熱ハ先ツ痞瘡ニ始リテ左ハ魚口右ハ便毒

剤配 騎馬癰ハ龍膽瀉肝滲濕湯仙遺湯用テソヨキ

[六丁表]

痘疹

剤配 疱瘡ハ飯ヲ炊クカ如クニテ前ニハ燃シ後ニハ火ヲ引

剤配 疱瘡ハ消毒飲ニ保元湯升麻葛根初メニハモレ

疱瘡ハ日本ハ天平十七年唐ハ漢ノ世ヨリゾ始ル

癰疔

剤配 癰疔ハ脾胃ヨリ起ル者ナレハ輕キ食事ニ如クモノソナキ

癰疔ハ敗毒散ニ内托ヤ又ハ防風當皈飲ナリ

[六丁裏]

産前後

剤配 妊娠ハ淫事ト食ト慎ミテ起居静ニ心ツクヘシ

産前後催生飲ニ芎皈湯五積達生時宜ニヨルヘシ

唐ノ古キ藥師ノ書ノ中腹帯サセシ言ノ葉モナシ

血暈ニ瘀血ノ症ハ酢ヲ嗅セ脱血ナラハ酢ハアシキ也

追加　朱陵

意茶談 蘓子降氣目當ニスルハ喘息ノ足ノ冷ニ用ヘキナリ

同 五苓散目當ハ雑病口渇シ小便不利ヲ愈ス薬ヨ

同 旋覆花代赭石湯其目當呕ノ大便秘結也ケリ

同 半夏瀉心用ル症ハ呕瀉シテ心下痞鞕ヲ目的トハスル

[七丁表]

同 常々ニ氣ムツカシクテ名ノツカヌ症ニハ沉香天麻湯ナリ

同 小兒ノ病夜々熱ノアルモノハ多ハ虫ト心得テヨシ

同 腫レ病ニ咳嗽有テ腹中ノ動氣強ハ死證也ケリ

同 長病ニ動氣強テ息短足ノ冷ルハ死證也ケリ

同 腹痛ニ按テ痛ムハ虚ノ痛按テヨキノハ食積ト知レ

治痢經驗 小兒ノ痢附子理中湯ニ肉桂ト茯苓大棗加テゾモル

△灸

肩痛ミ欝氣ト上リニハ膏盲七九三里三陰

脾胃弱ク積氣ト強クテ腰痛ミ十一十四章門ヲスヱ

労症ハ四花患門ヲ早クスヱ日々ニ數マシ驗アルヘシ

心痛ニ浮大弦長ハ死スルナリ沉細ナルヲ吉ト知ヘシ

[七丁裏]

刺禁

漉々汗赫々熱　大虚　飢渇針ヲ禁スト兼テ知ヘシ

大毒ノ百日過テ再發ハ不治ノ症トハ兼テ知ベシ

省目ハ小兒ハ治スル二十歳以上ノ人ハ不治ト知ベシ

疱瘡目百日過テ其後ハ治スルコトナキ者ト知ベシ

打目ヨリ内障ト變シタルモノハナヲラヌ者ト思フベシ

中毒ハ目ハ一向ニ見ベスシテ唾ガ水ニ沈ムモノ也

生豆ノ腥キ氣ヲ覺ヘヌハ毒ニアタリシ故ト知ベシ

［八丁表］
［八丁裏］
［裏表紙見返し］
［裏表紙］
田渕宗古主

【注釈】

［見返し］
○素問瘧論篇三十五岐伯ノ曰［…］未レ可レ治也…典拠は『黄帝内経素問』「瘧論篇三十五」。写本者の底本は岡本一抱による和刻本『黄帝内経素問諺解』と目される。原文は「岐伯曰、經ニ言ク無レシ刺ニ二スコト熇々ノ之熱一ヲ、無レ刺ニ渾々ノ之脈一ヲ、無レ刺ニ二コト漉々之汗一、故ニ為ニ二スハ其ノ病逆一ヲ未レタ可レ治ス也」（一四丁裏～一五丁表。割註は省略し、読点を加えた）。なお、現代語訳は以下の通り。「岐伯がいう。医経の中に、高熱のときは刺鍼するな、脈の乱れたときは刺鍼するな、汗が出て止まらないときには刺鍼するな、とあります」。『現代語訳　黄帝内経素問』中巻、六八～七一頁。
○瘧…瘧疾の症候は、寒戦（身震い）、壮熱（実証に現れる高熱を指す）、汗が出る、定期的に起こることを特徴としており、病因は主に夏季に暑邪を感受する、もしくは山嵐瘴気（南方の山林の湿熱が蒸欝して発生する病邪）に触れたり、寒湿の邪を受けることにある。寒湿の邪とは、六淫の一つ寒（陰邪に属し、陽気を傷つけやすく、気血活動に影響する性質を持つ）と湿（陰邪に属し、重く濁っていて粘っこく、気の活動を阻害し、脾の運化を邪魔することができる性質を持つ）が結合した病邪。発病すると、外側を防衛する陽気が運行しなくなり、血流が滞り、その結果、皮膚の疼痛、関節の痙攣麻痺などの症状が発生する。『中国漢方医語辞典』、七六～七七、八四、二四三～二四四頁。
○渾々…脈の乱れている様子。『現代語訳　黄帝内経素問』中巻、六九頁。
○熇々…熱勢の極めて盛んな様子。『現代語訳　黄帝内経素問』中巻、六九頁。
○漉々…汗が出て止まらない様子。『現代語訳　黄帝内経素問』中巻、六九頁。
○註云［…］大ニ出一ヲ也…『黄帝内経素問諺解』巻四之二の註によれば、熇々は「熱盛ニ來ルヲ云」、渾々は「無ニ端緒一ノ貌チ」、漉々は「流水貌汗大出ノ貌ナリ」とある。熇々と漉々については正確に意味を捉えているが、渾々については、古代中国の宇宙論「渾天説」の用例に見られる「端緒が無い」という文脈に沿わない理解が提示されている。
［一丁表］
○傷寒…広義は外感発熱病の総称をいう。狭義には太陽表証に属する一つの証型であり、その主要な症状は発熱、悪

寒、無汗、項が強張り痛む。脈は浮緊。『中国漢方医語辞典』、二三七頁。

○陰病…三陰経の病を指す。一般には虚証（正気が不足し、抵抗力が低下した状態）、寒証（寒邪が原因で寒が現れる症候。もしくは、陽気の衰弱、陰気の過剰のため身体の機能と新陳代謝活動の減退、抵抗力の減退が起こり、寒の症候が現れた状態）の総称。『中国漢方医語辞典』、一四一、一四三、二三七頁。

○陽脉…経脈中の陽経を指し、その中に手足の三陽経、督脈、陽維脈、陽蹻脈などを含む。『中国漢方医語辞典』、六一～六二頁。

○鼓…ここでは脈拍を鼓と表現している。

○陽ニ陰コソ危カリケレ…ここでは陰病の治療に陽脉を用いるのはよいが、陽病に陰脉を用いるのは危険であることを述べている。なお、陽病とは三陽経の病を指し、一般には実証（病邪が亢進して盛んであり、正気と外邪の抗争の反応が激しいこと、もしくは人体内部の機能障害によって生じた気血の鬱結、水飲、停痰、食積などを指す）の総称。また、陰脉とは経脈中の陰経を指し、その中に手足の三陰経、衝脈、陰維脈、陰蹻脈などを含む。『中国漢方医語辞典』、六一、一四二～一四三、二三七頁。

○寸尺…寸脈と尺脈を指す。これらが属する寸口脈は三部に分けられ、そのうち橈骨茎状突起が関、関の前（手根骨の端）が寸、関の後ろが尺であり、それぞれの脈拍を関脈、寸脈、尺脈という。『中国漢方医語辞典』、一二六頁。

○緊…ここでは緊張の意。

○傷風…風は病因で、六淫の一つ。常にその他の病邪と結合して病気になる。風邪に傷められて発病するのを傷風感冒と俗称する。『中国漢方医語辞典』、七六頁。

○風毒…風湿。風と湿の結合した病邪を指し、リュウマチ関節炎、擬似リュウマチ関節炎に類似した症状をもたらす。『中国漢方医語辞典』、七九、二七五頁。

○脚氣…ビタミンB1欠乏による栄養失調症の一。末梢神経が冒されて、足がしびれたり、むくんだりする。

［二丁裏］

○黄疸…おうだん。全身や眼および小便が黄色くなるのがその主たる症候。病因は、脾胃の湿邪が内に蓄積され、胃腸が調和を欠き、胆液が外に溢れることによって引き起こされる。『中国漢方医語辞典』、二五〇頁。

○濕熱…湿と熱が結合した病邪をいう。『中国漢方医語辞典』、七八～七九頁。

［二丁表］

○水腫…水気。水液が体内に停留して生じる病症を指す。通常、脾胃が陽虚であるため気湿を運化できずに病気になる。『中国漢方医語辞典』、七七頁。

○浮腫…水腫に同。

○食傷…食あたりのこと。

○食滞…暴飲暴食や、不潔なものの飲食、冷たいものを食べ過ぎたことによって引き起こされる急性消化不良の病症。『中

国漢方医語辞典』、八二頁。
○泄瀉…大便が希薄で、出たり止まったりするものを泄といい、大便が一直線に下り、水が注ぐようなものを瀉と呼ぶ。『中国漢方医語辞典』、二四七頁。
○痢疾…痢病に同じ。古くは滞下、腸澼ともいう。夏・秋の季節に良く見られる腸の急性伝染病のこと。細菌性下痢やアメーバ赤痢ほか、その他腸の疾病まで含んで指す場合もある。『中国漢方医語辞典』、二四五～二四六頁。

［二丁裏］

○瘕…一種の病名。気が集まって起きるもの。『中国漢方医語辞典』、三九一頁。
○痢病…痢疾に同。
○裏急後重…大便する前に腹が痛み、大便しようとする時に待ちきれないのを「裏急」と呼び、大便する時に逼迫しているのに、すんなりと排出されないで、肛門に重く落ち込むような感じのあるものを「後重」という。『中国漢方医語辞典』、二四七頁。
○治痢經験…加藤玄順（一六九九～一七八五）による痢病の治方書。延享五（一七四八）年刊。『日本漢方典籍辞典』、二九〇頁。なお、歌中の附子理中湯とは、人参、白朮、乾姜、甘草を用いて作る漢方方剤に、附子を用いて作った方剤。典拠である『治痢経験』「小児治痢要法」には「其方弦人參白朮茯苓肉桂附子乾薑大棗甘草」（一六丁裏、訓点および割注は省略）とあり、和歌の内容と一致する。
○浮洪…脈象の一種である浮脈と洪脈のこと。皮膚の表面を浮いて来るので、指を軽く触れるだけで拍動を感じ、強く抑えるとかえって弱くなるものを浮脈と呼ぶ。通常、感冒や或る種の急性の熱病の初期に見られる。また、波が湧き立つように脈を打ち、来る脈は強く、去る脈が弱いものを洪脈という。泄瀉にこの脈象が見られた場合は、病状がさらに進むことを示している。『中国漢方医語辞典』、一二九～一三〇頁。
○弦急…弦急脈のこと。
○中風…脳血管傷害などの疾患を指し、卒中ともいう。『中国漢方医語辞典』、二七〇頁。
○血虚…営血の不足により虚弱が現れる病理を指す。『中国漢方医語辞典』、九六頁。
○氣虚…多くは臓腑の損傷、重病、長患いによる元気の損耗によって引き起こされる。一般的症状としては、顔面蒼白、頭がくらみ耳鳴りがする、心悸、呼吸がせわしい、動くと汗が出、話し声は低くかすかで、倦怠し、脱力がするなどが確認できる。『中国漢方医語辞典』、九六頁。
○丹溪…元の医師朱震亨（彦修）。歌の典拠は、張路玉『張氏医通』巻一中風門の「中風」項における朱丹溪からの引用箇所「丹溪云、人有気虚、有血虚、有湿痰。左手脉不足、及左半身不遂者、四物加姜汁、竹瀝。右手脉不足、及右半身不遂者、四君子佐姜汁、竹瀝」。『張氏医通』、三頁。なお引用にあたっては、底本の簡体字を常用漢字に、セミコロン及びクエスチョンマークは適宜句読点に改めた。以下同。

○張路玉…清の医師張璐。

［三丁表］

○積聚…気の積もったものを積といい、その発生には一定した部位があり、その痛みもその部位から離れない。気の集まるところを聚といい、どこにでも発生し、その痛む所も一定していない。積と聚が合同したものは、臓腑中に停滞集結して散ることのない気病である。『中国漢方医語辞典』、三九五頁。

［三丁裏］

○咳嗽…がいそう。症状の一つ。六淫の外感、臓腑の内傷がそれぞれ肺に影響して咳嗽を引き起こす。音があり痰のないものを咳、痰のために咳を引き起こすものを嗽と呼ぶ。『中国漢方医語辞典』、二五九頁。

○浮濇…脈象の一種である浮脈と渋脈のこと。浮脈は既述。渋脈とは、脈の流れ方が滑らかでなく、弱く細くて遅く、一呼吸に三～五と不規則で、小刀で竹を削るような状態の脈のこと。通常、血が少なくて精気が傷つく、津液が損傷する、気が渋滞し、血が鬱結することが原因である。『中国漢方医語辞典』、一二九頁。

○伏沉…脈象の一種である伏脈と沈脈のこと。脈が伏在しており、強く骨に着くほど押さえてはじめて触れることができるのが伏脈。咳症、劇痛、もしくは邪気が内部に閉塞する病症に見ることができる。また、軽く指を当てただけでは感じられず、強く押さえてはじめて拍動が感じられる脈をいう。主病は裏にある。『中国漢方医語辞典』、一二九～一三一頁。

［四丁表］

○金匱…中医書『金匱要略』ではなく、ここでは金匱腎気丸のこと。『中国漢方医語辞典』、二〇七頁。

○眩暈…眩とは目の前が暗くなることであり、暈とは頭がくらくらすることである。多くは体質の虚弱、肝風、痰気や精神的刺激などの要因と関係がある。『中国漢方医語辞典』、二六七頁。

○喉痺…正しくは喉痹。痹とはふさがって通じないという意。咽喉部の一部に気血が停滞し、通じないという病理変化である。およそ咽喉が腫れて痛む諸病で、閉塞して通じない、嚥下が不順、嚥下困難を感じるなどの症状は、いずれも喉痺の範疇に属する。『中国漢方医語辞典』、三三九頁。

［四丁裏］

○癲狂…癲と狂は精神錯乱の疾病である。癲は抑鬱状態となって現れ、情感冷淡、言語錯乱などが起こる。痰気鬱結、もしくは心脾両虚によって生じる。狂は興奮状態となって現れ、騒ぎ回って落ち着かない、人を打ち罵るなどの症状を引き起こす。癲が長引くと、痰が鬱結し、火と化し、狂証が現れる。狂の病が長引くと、欝火が次第に拡散され、痰気が滞留するとまた癲証が現れる。『中国漢方医語辞典』、二六九頁。

○癲癇…癇証。発作的に精神、意識に異常をきたす疾病。発作時に突然昏倒し、口から泡を吹き、両眼が上視し、四肢が引きつるなどの症状上の特徴がある。『中国漢方医語辞典』、

二六九頁。
[五丁表]
○犬陽…犬傷の誤り。
○呃逆…あくぎゃく。気が逆行して上に衝き上がり、喉に連続的にヒック、ヒックという音が出る症状。『中国漢方医語辞典』、二七九頁。
○寒呃…胃寒呃逆。この症状では、しゃっくりの音は重く緩慢で、熱を得るとしゃっくりは減り、寒を得るとしゃっくりは増し、手足は冷え、食は少なく軟便、小便は透明で長く、舌苔は白潤である。『中国漢方医語辞典』、二七九頁。
○熱呃…胃熱呃逆。この症状では、しゃっくりの音は大きくはっきりしており、間断なく起こり、力があり、煩渇、口臭があり、顔の色は赤く、便秘し、舌苔は粗く黄色である。『中国漢方医語辞典』、二七九頁。
○煩渇…煩とは胸の中が火照って熱くなり、苛立つ状態。胸苦しく感じる煩熱があり、口が渇くが、落ち着いている場合を煩渇という。これは熱が盛んで津を傷つけたことによって引き起こされる。『中国漢方医語辞典』、二五四頁。
○膈噎…噎膈とも。いっかく。えっかく。食道通過障害のこと。飲み込む時に物が喉につかえる感じがするのが噎、飲食物が下に降りないものを膈という。胃癌、食道癌、食道狭窄、食道痙攣などの病変に見られる。『中国漢方医語辞典』、二八〇頁。
[五丁裏]
○三陽…太陽、陽明および少陽の三経の総称。その中に手の三陽と足の三陽を含み、実際は六本の経脈である。六経の弁証において、三陽の病系は病邪が体表の浅い所にあるか、もしくは六腑に病があることを指す。『中国漢方医語辞典』、六四頁。
○膈噎…膈噎の誤り。
○中暑…夏季の炎熱の気温の中で暑邪に当てられて発生する病邪を指す。症状は、突然昏倒する、身熱、悪心、嘔吐、大汗もしくは無汗、顔面蒼白、意識混迷などである。『中国漢方医語辞典』、一三九頁。
○便毒…横痃。各種の性病に伴う鼠径リンパ腺の腫脹を指す。初期には杏の種のような形だが、次第に鶩鳥の卵大になり、堅くて痺れ痛み、赤く腫れて灼熱、もしくは微熱はあるが発赤はないなどの状態になる。潰れた後に膿液が出て、収口しにくいものを魚口という。『中国漢方医語辞典』、三三四頁。
○疳瘡…下疳。梅毒による陰部のただれ。
○騎馬癰…下馬癰のことか。腫瘍の現われが赤く腫れ高く突出する、熱を持ち疼痛がある、周囲の限界が明瞭である、化膿前には瘡頭はなく消えやすい、膿ができると潰れやすく、潰れた後の膿液は粘り気がある、瘡口が収まりやすい、これらを全て癰という。『中国漢方医語辞典』、三一三頁。
[六丁表]
○痘疹…痘瘡の発疹。
○疱瘡…痘瘡。天然痘のこと。

○日本ハ天平十七年…天平七年（七三七）の誤りか。『続日本紀』の同年項には「自」夏至」冬、天下患二豌豆瘡一【俗曰二裳瘡一。】、夭死者多」とある。なお、底本は新日本古典文学大系を用い、引用文の表記は底本に従った。

○内托…内服薬によって瘡傷を治療する場合の三代治療法の一つ。すなわち、補益気血の薬物を使用して正気が毒邪を外部へ排出するのを援助し、毒邪が体内に陥入しないようにする方法をいう。『中国漢方医語辞典』、一九七頁。

［六丁裏］

○唐ノ古キ藥師（クスシ）ノ［…］言ノ葉モナシ…腹帯は中国には無い日本の医療文化。腹帯を最初に使ったといわれるのは三韓を征するために出陣した神功皇后で、妊娠後期であったため鎧が合わず、石を挟んだ帯を結んで出陣し、無事に凱旋し、応神天皇が誕生したという。酒井シヅ「腹帯（いわた帯・鎮帯）」九～一一頁。

○血暈…血分が病を受けて引き起こす昏厥（突然倒れて、四肢が厥冷し、意識不明、人事不省に陥る症候）の症状。『中国漢方医語辞典』、二七二、三七一頁。

○瘀血…体内で血液が或る一定の箇所に滞る病症のこと。そのうち、経脈外に溢れ、組織の間隙に溜まって壊死した血液を悪血といい、血液の運行が阻害され、経脈管内や器官内に溜まったものを蓄血というが、これらもやはり瘀血の範囲に属する。『中国漢方医語辞典』、八一頁。

○心下痞鞕…しんかひこう。痞とは、胸腹間の気機が塞がれて不快感を自覚する症状のこと。もし、押して抵抗感があれば、それは邪熱が胃の中の停水と阻み合うのであり、これを心下痞鞕という。『中国漢方医語辞典』、二五八頁。

［七丁表］

○小兒ノ痢［…］大棗加テゾモル…二丁裏に登場した三首目の歌と同。

○膏肓…経穴の一つ。『鍼灸重宝記』（一七四九年再版［初版は一七一八年刊］）によれば、鬱症に効く経穴とされる。

○章門…経穴の一つ。『鍼灸重宝記』（一七四九年再版）によれば、積聚に効く経穴とされる。

○四花…四華。経穴の一つ。『鍼灸重宝記』（一七四九年再版）によれば、労瘵に効く経穴とされる。

○患門……経穴の一つ。『鍼灸重宝記』（一七四九年再版）によれば、労瘵に効く経穴とされる。

［七丁裏］

○刺禁…禁刺。針方の禁忌事項。『中国漢方医語辞典』、二三一頁。

○赫々…熱がこもり、顔が真っ赤になる様子。

○大毒…薬物の毒性がかなり強いものをいう。『中国漢方医語辞典』、二一八、三六一頁。

○中毒…毒物が体内に進入し、その毒性作用によって発生する病症。『中国漢方医語辞典』、八三頁。

【参考文献及び史料】

参考文献

▲青木和夫［ほか］校注『続日本紀』二（新日本古典文学大系一三）、岩波書店、東京、一九九〇年。

▲赤松文二郎『群誌後材　扇城遺聞』、中津小幡紀念図書館、一九三二年。

▲池田廣司編『中世近世道歌集』、古典文庫、東京、一九六二年。

▲大分県教育会編『大分県人物志』、歴史図書社、東京、一九七六年。

▲大塚恭男［ほか］編『講談社東洋医学大事典』、講談社、東京、一九八八年。

▲川村純一『病いの克服　日本痘瘡史』、思文閣、京都、一九九九年。

▲漢方医学大辞典編集委員会編『漢方医学大辞典』、雄渾社、東京、一九八三年。

▲黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年。

▲最新医学大辞典編集委員会編『最新医学大辞典』第二版、医歯薬出版、東京、一九九六年。

▲酒井シヅ「腹帯（いわた帯・鎮帯）」（『日母医報』第四九巻八号、一九九七年所収）。

▲下毛郡教育会編『下毛郡誌』、大分県下毛郡教育会、中津、一九二七年。

▲創医会学術部編『漢方用語大辞典』、燎原、東京、一九八四年。

▲中医研究院、広州中医学院、成都中医学院編著、中医学基本用語邦訳委員会訳編『中国漢方医語辞典』、中国漢方、東京、一九八〇年。

▲張璐『医通』一六九五年成（樊正倫［ほか］編『張氏医通』、中国中医薬出版社、北京、一九九五年）。

▲中村謙介『和漢薬方意辞典』、緑書房、東京、二〇〇四年。

▲南京中医学院編、石田秀実監訳、島田隆司［ほか］訳『現代語訳　黄帝内経素問』上・中・下巻、東洋学術出版社、市川、一九九一～九三年。

▲畑有紀「和歌形式で記された食物本草書の成立について」（『言葉と文化』第一四号、二〇一三年所収）。

▲半田隆夫校訂『市令録』第一輯、中津市立小幡記念図書館、一九七八年。

▲古林見桃『捷徑醫療歌配剤』、一七七二年（臨床漢方処方解説第四冊、オリエント出版社、東京、一九九五年影印版所収）。

▲本郷正豊『鍼灸重宝記』、一七四九年再版（『鍼灸則　鍼灸重宝記　五極灸法　名家灸選』、〈鍼灸医学典籍大系第一七巻〉、出版科学総合研究所、東京、一九七八年影印版）。

▲本郷正豊著、小野文恵解説『解説鍼灸重宝記』、医道の日本社、横須賀、一九五九年。

▲松尾茂『道歌大観』第一～三巻、光融館、東京、一九一二年。

▲真柳誠「中国本草と日本の受容」（『中国本草図録』第九巻、中央公論社、東京、一九九三年所収）。

▲山崎有信『豊前人物志』、美夜古文化懇話会、福岡、一九七三年復刻版。
▲李時珍『本草綱目』、一五九六年（中国書店、北京、一九八八年）。
▲『寛政重修諸家譜』第十、続群書類従完成会、東京、一九六五年新訂版。

史料

▲「醫療歌配劑秘本」（写本、仮綴二八丁、二七・五糎×一九・八糎、田渕家資料、仮目録番号九、中津市歴史民俗資料館蔵）。
▲「山本流外科秘傳書」（写本、仮綴二八丁、二七・三糎×二〇・〇糎、田渕家資料、仮目録番号十二、中津市歴史民俗資料館蔵）。
▲土屋藍洲撰「括秘録」（写本、仮綴六三丁、二七・三糎×横二〇・一糎、田渕家資料、仮目録番号十八、中津市歴史民俗資料館蔵）。

注

1 仮目録番号九。外題には角書「不許他見」が付されているが、本稿では角書を除いた呼称を用いる。
2 全八丁と考え、表紙と裏表紙は除いて丁数を数える。
3 仮目録番号十二。
4 「醫療歌配劑秘本」一丁表。「山本流外科秘傳書」叙、一丁表。
5 「山本流外科秘傳書」、一丁裏。なお、［　］内の記述は筆者による加筆。
6 「山本流外科秘傳書」、一丁表。なお、原文では読点は朱である。
7 仮目録番号十八。
8 『寛政重修諸家譜』第十、一九六五年新訂版、四七頁。
9 「括秘録」、一丁表～裏。なお、原文では冒頭の△印と読点は朱である。
10 原田東岳は中津藩客儒をつとめたとされる。赤松文二郎『群誌後材　扇城遺聞』、三七五頁。
11 赤松文二郎『群誌後材　扇城遺聞』、三七五～三七六頁。なお、引用文には読点を付し、表記を新字に改めた。
12 中津市歴史民俗資料館田中布由彦館長の御教示による。
13 『市令録』第一輯、一〇二頁。
14 『市令録』第一輯、一〇四頁。
15 『市令録』第一輯、一〇〇頁。
16 『市令録』第一輯、一〇〇頁。
17 『市令録』第一輯、一〇三頁。
18 『市令録』第一輯、一一〇頁。
19 『市令録』第一輯、一〇〇頁。
20 真柳誠「中国本草と日本の受容」、二二〇頁。
21 『本草綱目』巻一、七頁。底本は中国書店版を用いた。この記述の存在は、既に畑有紀が指摘しているが、原文、

読み下しともに本稿と異なるところがある。「和歌形式で記された食物本草書の成立について」、四三～四四頁。

22 畑有紀「和歌形式で記された食物本草書の成立について」、三九～四〇頁。

23 道歌（教訓和歌）を収集した資料集としては、松尾茂『道歌大観』や池田廣司編『中世近世道歌集』（古典文庫、東京、一九六二年）がある。なお、松尾茂は「家持集」に遡って教訓和歌を収録している。

24 畑有紀「和歌形式で記された食物本草書の成立について」、三七頁。

村上家の人物交流 ― 所蔵掛幅を素材として―

吉田　洋一

要旨

本稿は、村上医家史料館所蔵の一点の掛幅を素材として、江戸時代中期から後期における村上家とその周辺の人物交流について検証するものである。計一一点の史料のうち、三浦梅園（一七二三～八九）作のものが三点と最も多い。梅園は、元文四（一七三九）年と寛保三（一七四三）年ころ、中津の市井にあって私塾を開いていた藤田敬所（一六九八～一七七六）のもとで学んだ。その他制作者が判明しているものは、日出藩の学者帆足万里（一七七八～一八五二）、久留米藩儒樺島石梁（一七五四～一八二七）と梯隆恭（一七六八～一八一九）などである。特に彼らは、七代目村上玄水（一七四八～一八四三）との交流が確認されている。また、江戸時代後期の医者で、料理書『卓子式』（天明四年刊）を著した田中信平（一七四八～一八二四）の揮毫が確認できる。

キーワード

村上家　三浦梅園　帆足万里　梯隆恭　樺島石梁

はじめに

村上医家史料館は、平成八（一九九六）年の開館以来、村上家を中心とした資料の収集・保存・展示を行っている。本稿は同館に所蔵されている「諸名家書簡等貼合掛軸（史料番号：一〇九）」に関して考察するものである。この史料は一点の掛幅（本体：一九二・七糎×一二〇・〇糎、本紙：一五二・〇糎×一〇八・三糎）に一一点の書状類（計四点）、揮毫類（計四点）、詩箋類（計二点）、刷物（一点）を添付し表装したものである。先ず掛幅の概要を述べた後、各史料を個別に検討する。

一、史料の概要

この掛幅は、村上医家史料館本館の土蔵（二階は収蔵庫）一階に常設で展示されているもので、表装などの痛みが激しいが、幸い添付史料自体は比較的良好な状態が保たれている（図一）。全一一点の史料は、書状類三点（うち尺牘類一点）、揮毫類四点、詩箋類三点、刷物類（陰刻）一点である。詩箋類のうち一点は絹布と思われるが、その他はすべて和紙に記されたものである。

掛幅の作成年や制作者などは特定できない。表装の裏面に「反故表」と墨書（図二）、「参拾参」と記された添付紙（図三）が確認できるため、村上家所蔵の史料群から適宜選定し表装されたものと思われる。

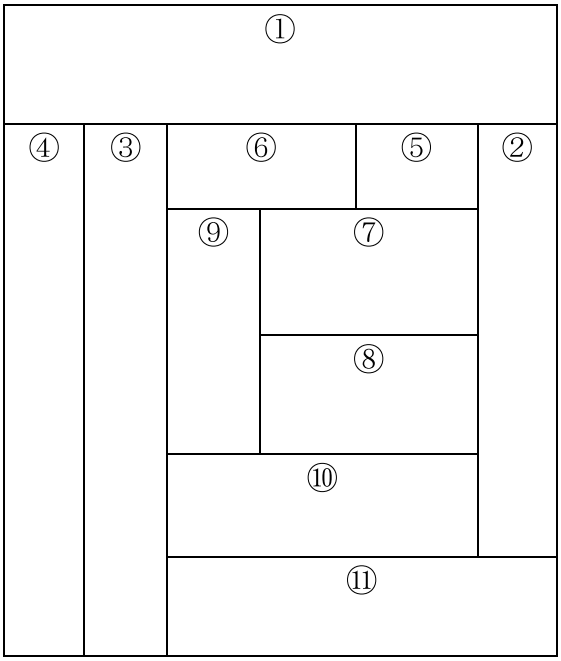
図一　掛幅の全体図（村上医家史料館蔵）。

図三　掛幅の裏の軸部

図二　掛幅の裏の軸部

二、各史料の概要

ここでは、各史料に通し番号（図四）を付し、作成者が判明している史料に関しては、適宜その事績や村上家との関係について解説する。



図四　掛幅（図一）の配置図

①帆足万里書状

帆足万里（一七七八～一八五二）は江戸時代後期の豊後国日出藩の儒者。名は万里。字は鵬卿。通称は里吉。安永七年（一七七八）正月一五日生。日出藩家老帆足通文の第三子。母は菅沼政常の女。寛政三年（一七九一）、一四歳の時豊後小浦の脇愚山（蘭室、一七六四～一八一四）に師事する。その後大坂の中井竹山（一七三〇～一八〇四）、福岡の亀井南冥（一七四三～一八一四）、京都の皆川淇園（一七三五～一八〇七）ら当時の碩学を歴訪して教えを受けた。また師愚山を通じて郷里の先輩である三浦梅園（一七二三～八九）の学問に深く影響を受けた。万里の学問は幅が広く、和漢の学術を究めたうえに、天文・律暦・医術・算数・仏教・経済・蘭学にも精通していた。経学は朱子学を基本としながらも、漢唐の訓詁学、およびわが国の荻生徂徠・伊藤仁斎・中井履軒などの説をも折衷して自家独自の見解を持っていた。文化元（一八〇四）年、日出藩に出仕するが、藩主もかれを給費して学問に専念させた。天保三（一八三二）年、五五歳の時家老となり藩財政の立て直しに功績をあげ、同六年に致仕する。以後は家塾西精舎で子弟の教育に専念する。その門下に岡松甕谷（一八二〇～九五）・毛利空桑（一七九七～一八八四）らがいる。

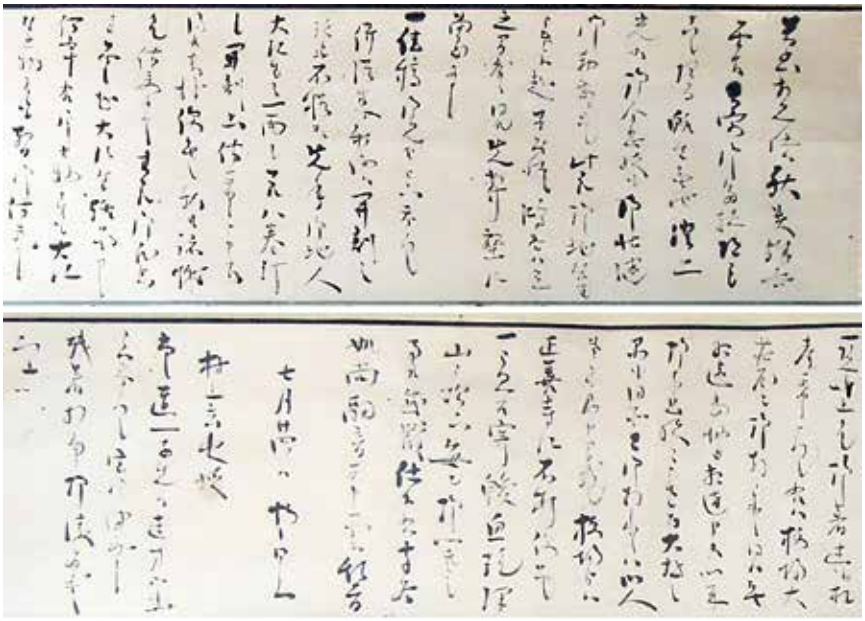
万里の代表的な著述は、わが国の科学史の発端をなした『窮理通』、独自の日本文化史ともいえる『入学新論』、国家経綸の具体策を論じた『東潜夫論』、漢蘭折衷医学書である『医学啓蒙』などであり、ほかに『論語標註』をはじめとする経典類の注釈や『帆足先生文集』などがある。とりわけ『窮理通』八巻は、暦法・恒星系・太陽系・地球・引力・大気・蒸気・生物といった項目を、外来の書物から物理学中心に組み立てた労作で、西洋近代科学の導入史の上でも意義深いものであ

る。『帆足万里全集』全二巻[1]にほとんどの著作が収められている。嘉永五年（一八五二）六月一四日没。享年七五、諡は文簡先生という。墓は大分県速見郡日出町松屋寺背後の康徳山にある[2]。

帆足万里と村上家の関係は、『医も亦自然に従う』に詳しい[3]。七代目村上玄水（一七八一～一八四三）は、文政二（一八一九）年中津にて解剖を実施し、『解臓記』を執筆しているが[4]、その後同一二年（一八二九）頃「解剖図説」を記したとされている[5]。この「解剖図説」は現存せず、その序文のみ村上医家史料館に保管されており、その作者が帆足万里である。以下、同書状について記す[6]。

【史料の原文】

貴書拝見仕候、秋暑餘甚
候ニ付、貴家御多福珍重
奉存候様ニ而、□生無他澄ニ
光候、御令息様も御壮健
御勘察ニ御座候、此節御地賢生
申遣候趣承知仕候、鴻基ハ有
之間敷候得共、先弊塾に
留置可申候、
一、佳稿御見せ被下忝奉存候、
　併従来私儀ハ開剖之
　設ニ不精候、先年御地人
　大江生に一面之節八巻計
　之開剖書借可申被申下候
　得共、其後便無之、私も諸術
　にて待受不申候、其節御蔵書
　に御座候趣、大江生話承申候、
　何卒右御書物にても、大江
　御書物にても、暫御借可申
　一覧之上にて、御著述も相
　考可申奉存候、右ハ板場大
　荘屋に御頼被成候得ハ無
　相違、当地に相達申候以来
　御令息様被申遣候而、大抵之
　品も同所に御頼被候ハ、御人
　遣ニも及申間敷候、板場方ハ
　正善寺江不断便御座候、
一、被思召寄鮟血歟沢
　山被贈下、毎々御心遣之
　事も感戟仕候、右聞合
　如尚嗣音可申承候、頓首
　　七月廿四日　帆足
　　村上玄水様
尚々道一子先日遠方御出
被下忝御座候定御伴可申候
残暑折角御凌可被成候以上[7]



図五　①帆足万里書状

この書状は、帆足万里が「解剖図説」の序文を執筆する以前に玄水に送ったものと思われる。文中の「佳稿」を『解臓記』など一連の玄水著作物だと考えると、万里は、「佳稿」を拝見した後、「開（解）剖」には不精であるので、「大江生（大江春塘のことか）」から「八巻計之開剖書」を借りたうえで（序文の）著述を考えたい、と述べているのではなかろうか。「八巻」の解剖書とは、恐らく当時既板の解剖書の類だと思われるが詳細は不明である。

従来の帆足万里の事績には、中津との関係はほとんど記されていない[8]。しかしながらこの書状には、板場（現宇佐市安心院町）の大庄屋や、「道一」という玄水の門人と思われる人物らと交友があることも確認できるため[9]、今後さらなる検討が必要となろう。

②田中信平揮毫

田中信平（一七四八～一八二四、号・田信）は中津の医者で書画、書道、医学に多才な才能を発揮、特に、『卓子式』（シッポクシキ、天明四・一七八四年刊）という中国料理書を記したことで有名である[10]。

『惣町大帳』には寛政一三（一八〇一）年頃から文政六（一八二三）年まで「外科」として名が記載され、特に文化二（一八〇五）年の条には「線膏薬シイニイ」などのオランダ流外科の処方と思われる治療を施していたことは興味深い[11]。また中津の交友関係では、耶馬溪の屋形養民[12]（諸道、

一七四五～一八二六）と親密であり、書状の往復が確認されている[13]。

図六　②田中信平揮毫

図七　②落款（「田信」「子孚」）

揮毫には「莫辭杯酒十分勸（辞すること莫し杯酒十分の勧）田信書」とある。程明道[14]の「効行即事」に「莫辭盞酒十分醉、祇恐風花一片飛。（辞すること莫し盞酒十分の醉、祇に恐る風花一片飛ぶことを。）」という一節があり[15]、この箇所が典拠と思われるが、中国料理に造詣が深い信平らしい揮毫である。

③三浦梅園揮毫

三浦梅園（一七二三～八九）は、江戸時代中期の哲学者。幼名は辰次郎、長じて晋、字は安貞、梅園はその号である。享保八（一七二三）年八月二日、豊後国国東郡富永村（現国東市安岐町）に生まれた。家は祖父の代より医を業としており、長兄が幼逝して、家業を継ぐことになる。一六歳のとき、同藩の儒者綾部絅斎（一六七六～一七五〇）に師事し、元文四（一七三九）年頃には中津藩の儒者藤田敬所（一六九八～一七七六）に入門、四年後（寛保三年）に二度目の指南をしている[16]。師事期間はいずれも短く、梅園の学問はほとんど独学によって形成された。『浦子手記』という読書ノートは、延享元（一七四四）年、二二歳の頃から天明五（一七八五）年までの約四〇年にわたる記録である[17]。読書を通じて少年時代の梅園が最初に近づいたのは漢詩の世界であった。絅斎に手ほどきを受けて詩作に入り、晩年に至るまでに多くの詩を残し、また作詩法の研究の成果をのちに『詩轍』六巻（天明六・一七八六）年に著した。

少年のころから、もろもろの自然現象の原因に対する疑問があり、それを解こうとして、古代中国の自然哲学概論ともいうべき『淮南子』や西洋の天文・気象学説を紹介した『天経或問』[18]をはじめ多くの書物を繙いたが、答えは得られなかった。長い精神の彷徨ののち、二九歳（宝暦元・一七五一年）もしくは三〇歳のとき、ついに気の哲学に開眼し、宝暦三年に『玄論』を起草する。それが二三回の改稿を経て、安

永四（一七七五）年にようやく一応の完成をみる、梅園の哲学的主著『玄語』の第一稿であった。梅園は長崎に二度（延享二・一七四五年・安永七・一七七八年）、伊勢に一度（寛延三・一七五〇年）旅行し、小さな旅に数回出た以外に、生涯故郷を離れることはなかった。

延享四（一七四七）年には森藩主から招かれ、天明元（一七八一）年には久留米・小倉両藩主から招聘の意を伝えられたが、いずれも辞して受けなかった。医業のかたわら農事に専念し、塾生に学問を教えた。そしてその余暇のすべてを研究と著述に捧げた。梅園によれば、天地万物は根元的な一気（元気）が存在のさまざまなレベルにおいて現象したものにほかならず、それらの存在は全体として元気を頂点とするピラミッド構造をなしている。この構造のなかに位置づけられた個々の存在のあいだの関係を梅園は「条理」と呼び、条理を認識する方法を「反観合一」と名づけた。反観合一の方法によって天地の条理のあらゆる具体的な様態を記述しつくそうと試みたのが、自然哲学の著作『玄語』である。宝暦六（一七五六）年にはさらにかれの哲学の立場から過去の学説を批判的に論じた学問概論ともいうべき『贅語』を起草、改稿一五回、寛政元（一七八九）年に完成する。この両著と倫理学書『敢語』の哲学的三部作を「梅園三語」と呼ぶ。晩年には政治や経済にも目を向け、グレシャムの法則[19]を述べた『価原』（安永二・一七七三年）や、杵築藩主の諮問に応えた政治意見書『丙午封事』（天明六・一七八六年）を執筆、またみずから生物の解剖を行い、二度目の長崎旅行を機に西洋の学問や知識に著しい好奇の念を燃やし、最後まで知的探究の手をやすめなかった。寛政元（一七八九）年三月一四日没。享年六七。居宅の南の墓所に葬られた。著作は『梅園全集』、『三浦梅園集』（『岩波文庫』）、『日本科学古典全書』一、『大分県資料』一二、『日本思想大系』四一などに収める。

図八　③三浦梅園揮毫

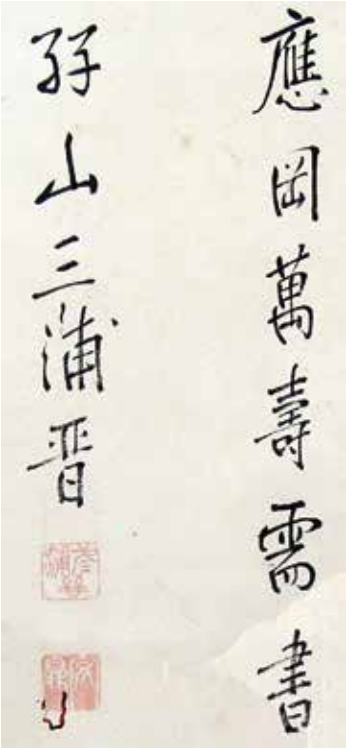
のちの中津藩藩校進修館設立に尽力した倉成龍渚（一七四八～一八一三）とは同門として親交があり、藤田敬所の遺文は、龍渚が編集し梅園が序文を記したという[20]。なおこの揮毫は、『論語』学而篇の一節である。

【史料の原文】

學而時習之

應岡萬壽需書

孖山三浦晋「彦輔□（落款）」「安貞（落款）」

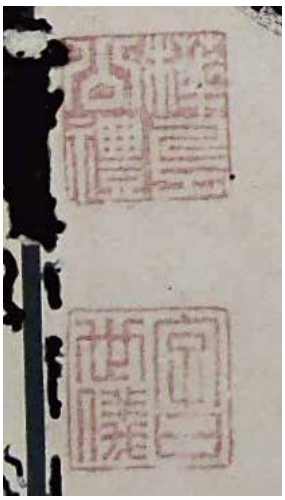


図九　梅園落款など拡大図

④樺島石梁揮毫

樺島石梁（一七五四～一八二七）は久留米出身の儒学者である。天明四（一七八四）年に江戸に遊学し、同六年には細井平洲（一七二八～一八〇一）に入門。寛政七（一七九五）年に久留米に帰国し、翌年久留米藩藩校明善堂設立に尽力した。石梁と中津との関係は現在のところ不明であるが、『石梁文集』（文化一五・一八一八年）には倉成龍渚と接し藩校新設について意見を交わしている（「答倉龍渚[21]」）。

図一〇　④樺島石梁揮毫



図一一　石梁落款

【史料の原文と読み下し】

（落款）

龍向天門入紫微（龍は天門に向かひて紫微に入る）

石梁謹書「樺島公礼（落款）」「字曰世儀（落款）」

揮毫は中国初唐の詩人沈佺期（六五六？～七一四？）作の七言律詩「龍池篇」の一節。全文は以下の通りである。

龍池躍龍龍已飛　龍池龍を躍おどらせて龍已に飛ぶ
龍德先天天不違　龍德天に先だちて天違はず
池開天漢分黄道　池は天漢を開いて黄道を分ち
龍向天門入紫微　龍は天門に向って紫微に入る
邸第樓臺多氣色　邸第楼台　気色多し
君王鳧雁有光輝　君王の鳧雁　光輝有り
爲報寰中百川水　為には報ず　寰中百川の水
來朝此地莫東歸　此の地に来朝して東帰すること莫かれ[22]

「紫微」とは天帝の住む宮殿を指し、この一節は、玄宗が宮中に入ったことを表したものであろう。

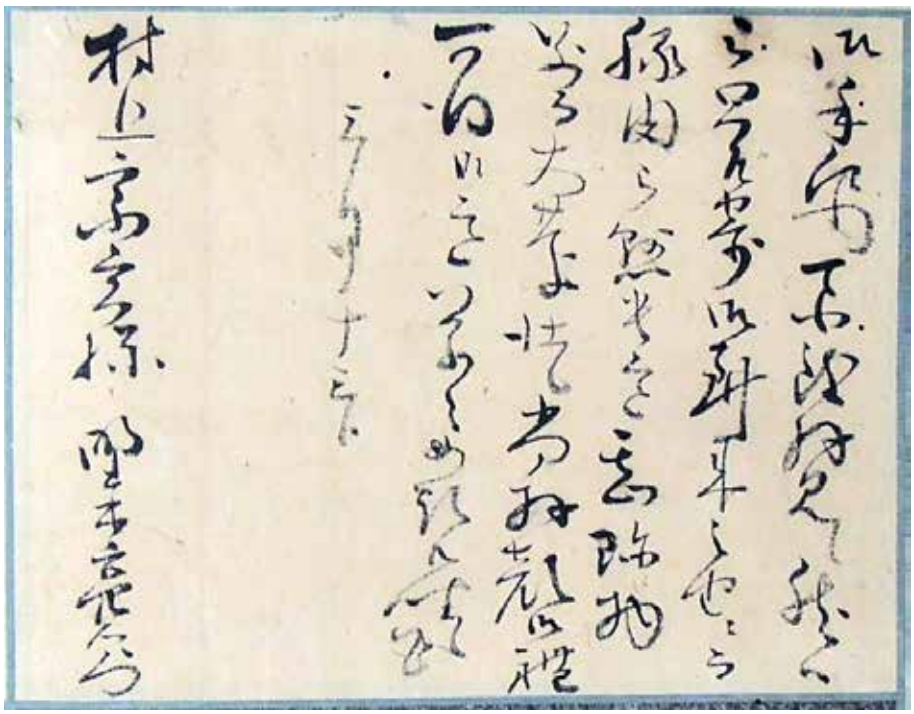
⑤野本亮右衛門書状

野本雪巌（一七六一～一八三四）は名は晃、字は謙卿、亮右衛門と称す。号は橘斎・雪巌。宇佐郡白岩村の生まれ。医師征矢野家[23]に寄宿し、原田東岳（一七〇九～八三）、倉成龍渚らに学び、京都に留学、帰国後藩主の招聘に応じて藩校進修館の創設に尽力、龍渚とともに、学規・学則を作成。江戸藩邸でも経書を講じた。

【史料の原文】

御手紙忝致拝見候然ハ
被思召寄御到来之由ニ而
豚肉被懸貴意甚珎物
別而大慶仕候尚拝顔御禮
可得御意草々如斯御座候以上
三月十三日
村上宗玄様　野本亮右衛門

書中の「村上宗玄」とは、八代目村上春海（一八〇八～九三）のことと思われる。春海は文政七（一八二四）年に家督を相続し、同年帆足万里に入門（約六年間）。帰国後、藩医として従事、弘化年間（一八四四～四七）には森藩に招聘され藩主の診療に携わるなど中津以外でも活躍した。元治元（一八六四）年には隠居、杉全家との養子縁組が許された（後の村上田長）[24]。



図一二　⑤野本雪巌書簡

⑥三浦梅園書状

【史料の原文】

尚々
皆々様へ可然御祝詞
奉頼候妻より御同意
改年御慶無際限
申上候、又五郎随分無恙
申納候御安康御諭年
長敷罷在候御機遣被
被為成大悦奉存候敝宅
下間敷候、已上
無多事加年仕候右
御祝詞申述度如此御座候
尚期容日之時候、恐惶
謹言

三浦安貞
（花押）

正月五日
藤井元蔵様
参人々御中

文意は新年の祝詞であるが、宛名の「藤井元蔵」や追而書の「（又）五郎」という人名が未詳である。

図一三　⑥三浦梅園書状

⑦荻生徂徠和歌（刷物）

荻生徂徠（一六六六～一七二八）は寛文六年二月一六日（月・日には異説がある）に、江戸の館林藩邸で生まれた。祖父の代から医者の家系で、父の方庵は館林侯（のちの将軍徳川綱吉）の侍医を勤めた。延宝七年（一六七九年、一四歳）四月、父が上総国長柄郡本納村（現茂原市本納）に蟄居。以後、元禄三年（一六九〇年、二五歳）に赦されて江戸に帰るまで、一家は流落の生活を送った。この間、徂徠は乏しい書籍を精読し、学問の根底を培った。長兄を本納村の医者として残留させ、一家が江戸に帰ったのち、父の後は弟に嗣がせ、徂徠は芝増上寺門前に住み、程朱の学を講じたが、貧窮を極め、豆腐のからを食べて辛うじて生きたという逸話がある。しかしこの間に『訳文筌蹄』六巻を著わし、邦語で同訓の字の区別を、三四九項、二四三四字について解説した。これが文名を天下に知られるに至った最初の著書である。同九（一六九六）年八月、増上寺了也大僧正の推挙によって柳沢吉保（一六五八～一七一四）に召し抱えられ、将軍徳川綱吉にもしばしば講義するようになり、ついには五百石の禄を食むまでになった。服部南郭・安藤東野・三浦竹渓ら、柳沢侯の臣下が徂徠の門に入ったのは、この因縁による。

正徳四年（一七一四年、四九歳）に『蘐園随筆』を刊刻した。これは伊藤仁斎の学説および文章を忌憚なく攻撃したもので、後年、みずから識見未定の作と称したとあり、朱子学の立場よりする批判であった。この批判攻撃を通じて、徂徠は仁斎のみならず、程朱学をも超えるに至り、享保元年（一七一六年、五一歳）から二、三年の間に、『学則』一巻、『答問書』三巻、『辨道』一巻、『辨名』二巻、『論語徴』一〇巻を著わした。これより先、徂徠は「文は秦漢（すなわち唐宋の韓柳欧蘇の否定）、詩は盛唐（すなわち宋詩の否定）」の教を奉じ、いわゆる復古の学説が全面的に整頓されたと見られる。『論語徴』は『論語』の古義を、先秦の古書に見える古訓に徴して解明したもので、宋儒の性理学の立場からの解釈を排斥したものである。道光年間（一八二一～五一）に清で翻刻されたこともあり、徂徠の主著とされる[25]。

また『辨道』『辨名』は、復古学の立場から聖人の道を解明し、哲学・倫理・政治上の名義術語（たとえば「道」「仁」「君子小人」など）を考説弁論したものである。また『学則』では宋儒の禁欲説を斥けている。その後、清の『六諭衍義』が薩摩侯を経て幕府に献ぜられたとき、吉宗の命を受けて訓点を施し、これが享保六（一七二一）年（五六歳）一一月に刊行された。翌年には『政談』四巻を幕府に献じた。これは吉宗の諮問に対して応えたもので、幕府政治の制度の立て直しの必要を述べた。こうして現実政治に関わる面にも関心を持ち、『太平策』一巻、『明律国字解』三七巻などもその面での業績であるが、精励が度を過ぎて健康を害し、同一三年正月一九日、大雪が降りしきる中に、六三歳で没し、芝三田の長松寺に葬られた。

炒豆を嚙んで天下の人物を罵倒することを楽しみにしたと

いわれるが、宇都宮遯庵・伊藤仁斎・熊沢蕃山・木下順庵・貝原益軒らには、それぞれの長所を認めて推称し、伊藤東涯の学問には常に敬意を表していた。その復古の学は、単に儒学における考証学的な気風を開いたのみでなく、本居宣長らの国学にも影響を及ぼしたといわれる。また漢文を訓点によって読むことの限界を認め、中国音による直読を奨励したことなども、江戸儒学の後世への飛躍をあらかじめ見通した見識であったとされる。

交遊は、中野謙・堀景山・藪慎庵・入江若水・釈大潮・釈万庵ら、四方の名士と交わりを結んだ。弟子は、経学の側面では太宰春台・山井崑崙・宇佐美灊水らがあり、文学の方面では服部南郭・安藤東野・平野金華らがあり、そのほか防長・九州方面には、萩藩明倫館教授の山県周南があり、奥州方面には鶴岡藩の家老、水野華陰があり、京坂方面にもその影響は及んでいた。

著述は早く、全著作目録の作成は、なお将来の研究に委ねられている。上掲著書のほか、『大学解』一巻、『中庸解』二巻、『孟子識』一巻、『孝経識』一巻、『尚書学』一巻、『孫子国字解』十三巻など多数。その学術を批判したものには、宇野明霞・片山兼山・井上金峨・石川麟洲・五井蘭洲らがあり、詩文については、間もなく八大家や宋詩を尊重する時代が来るが、そのいずれの場合も、徂徠によって起された波紋の深刻さを証明するものである。

図一四　⑦荻生徂徠和歌

【史料の原文及び後序の読み下し】

茂郷上

寄松祝

かきりなきよハいとそしる
松枝の一葉〳〵に
こもる千年は
かくろハぬ國はありしな
いく千世もときはにしける
松の木陰に

向也播人永原生所搨徂徠先生五柳和歌業已爲
吾黨珎焉盖先生一時游戯優入他室也頃余得再
觀此国風二首于友人某處是先生權供一貴遊需
者而其宇韻令春容有加前觀乃苦請影之輙命剞
劂此無旨人所謂騏驥一毛虬龍片甲耳展玩之餘
幸與海内同志怡之無至韻也
寛政癸丑之冬昭曠館主人加定章記
「定章（落款）」「子虚（落款）」

向也（さき）に播人永原生、搨る所の徂徠先生五柳の和歌、業已に吾黨の珎と為すなり。盖し先生一時の游戯、優に他室に入るなり。頃ころ余再び此の国風二首を友人某の處に観るを得、権らく一貴遊の需むる者に供して、其の字韻春容をして前観に加ふること有らしむ。乃はち苦（はなは）だ之を影せんことを請へば、輙はち剞劂を命ずるも此の旨無し。人の所謂騏驥一毛、虬龍片甲なるのみ。展玩の余、幸いに海内の同志と与に之を怡びて、至韻すること無きなり。
寛政癸丑（五・一七九三年）之冬昭曠館主人加定章記す。

なお、「昭曠館（主人）」及び「加定章」に関しては未詳である。

図一五　荻生徂徠和歌解説

⑧黄錦尺牘

原文中の「黄錦」は未詳。添付された史料群うち唯一の絹布である。清人の可能性が高いと思われ、前述した田中信平との関連を検討する必要があろう。詩体は七言古詩の形態の

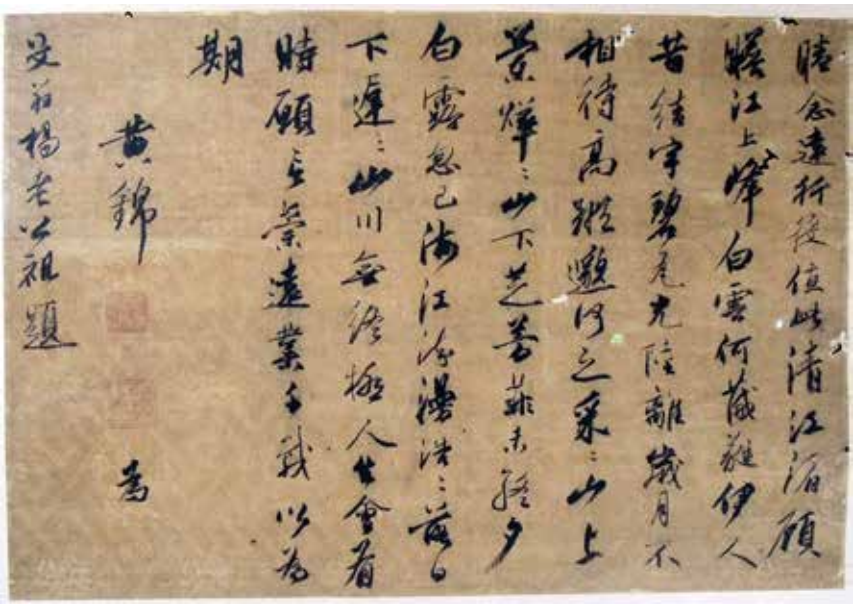
様である。

【史料の原文と読み下し】

晴念遠行役、値此清江渚、願
膳江上峰、白雲何蔵蕤、伊人
昔結宇、碧瓦光陸離、歳月不
相待、高躍邈何之、采々山上
蘭、燁々山下芝、芳菲未終夕、
白露忽已海、江崎漫浩々、落日
下遅々、山川無終極、人生會看
時、願尽榮遠業、千載以為
期、

黄錦（落款）（落款）為
旻翁楊老公祖題

晴れて念ず遠行の役、此に値す清江の渚、願わくは江上の峰を膳し、白雲何ぞ蔵蕤ならん、伊人昔結宇し、碧瓦の光陸を離れ、歳月相待たず、高躍の邈之を何んせん、采々たる山上の蘭、燁々たる山下の芝、芳菲未だ夕に終らず、白露忽ち海に已む、江崎漫に浩々たり、落日下に遅々たり、山川終に極み無く、人生着時会う、願わくは栄達の業を尽くし、千載以て期と為さん

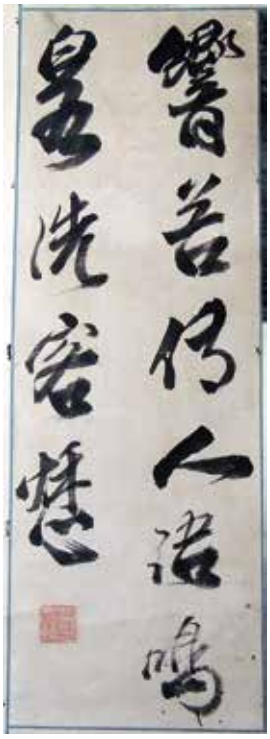


図一六　⑧黄錦詩箋

⑨柴野栗山揮毫

柴野栗山（一七三六～一八〇七）は江戸時代後期の儒学者。諱は邦彦、彦輔と称し、栗山・古愚軒と号す。元文元（一七三六）年、讃岐国三木郡牟礼村（現香川県高松市）に生まれる。父は柴野平左衛門、母は於沢（葛西氏）。はじめ高松の後藤芝山（一七二一～八二）に学び、一八歳より江戸に出て林家に従学した。三〇歳の時京都に移り高橋宗直（図南、一七〇三～八五）に国学を学び、三二歳で徳島蜂須賀藩に儒臣として出仕した。翌明和五年（一七六八）より江戸において世子らを教育し、三六歳よりは京都に住み堀川に塾を開いた。安永五年（一七七六）から同八（一七七九）年まで再び江戸にて世子の侍読を勤めた。同九年京都に帰り、西依成斎・赤松滄洲・皆川淇園と三白社を結ぶ。天明八年（一七八八）五三歳の時、幕府に招かれて江戸に赴き、寄合儒者となり『国鑑』編修を命ぜられ、翌寛政元年（一七八九）には松平定信・林信敬らとともに内裏造営に関与した。翌二年からは聖堂制度の改革にあたり、岡田寒泉（一七四〇～一八一六）とともに祭酒林信敬を補佐して林家塾内の異学の禁を実施し、信敬死後は林述斎を輔けて尾藤二洲・古賀精里らとともに昌平坂学問所の発足など学政にあたった。当時、栗山・二洲・精里は「寛政の三博士」と称せられた。著述に『栗山文集』六巻、『栗山堂文集』二二巻、『栗山堂詩集』四巻、『雑字類編』七巻、『東奥紀行』一巻、『上近衛公書』一巻、『聖賢障子図考』一巻、『冠服考証』一巻、『国鑑』二〇巻、『資治概言』二巻、『阿藩喪祭議』一巻ほかがある。文化四年（一八〇七）一二月一日、江戸駿河台にて死去。七二歳（広瀬典撰の墓表は七四歳とする）。はじめ牛込の林家墓地（東京都新宿区市谷山伏町）に葬られたが、のち小石川の大塚先儒墓所（文京区大塚）に改葬された。

栗山が中津に赴いたという記述は管見に及ぶ限り見いだせない。奥平の参勤交替の折に村上家が医者として随伴し、江戸にて入手した可能性もある。



図一七　⑨柴野栗山揮毫

響若傳人語鳴
泉洗客愁　「柴彦輔印（落款）」

この揮毫は張蠙[26]の「過山家詩[27]」が典拠である。響谷とは響き鳴る谷のこと。「響谷人語に伝え、鳴泉客愁を洗う」と読むか。

図一八　柴野栗山落款

⑩三浦梅園詩箋

三浦梅園が年少の頃から詩作に没頭していたことは前述したが、中津の田原氏に宛てたと思われる詩箋が以下の通りである。

【史料の原文と読み下し】

寶陀寺望田原氏之墟　　宝陀寺田原氏の墟に望む
一帶清溪両岸苔、香山　　一帯の清渓両岸の苔
欲盡出櫻臺、風花總似　　青山尽く桜台を出んと欲す
従天墜、仙鹿時看入苑　　風花総じて天墜に従ふが似く
来、烟樹高低黄麦秀、鳴　　仙鹿時に苑来に入るを看る
禽上下白楊哀、当時曾　　烟樹の高低黄麦の秀
布黄金處、唯有樵人説　　鳴禽の上下白楊の哀
月回　　当時曾て黄金を布す処
三浦晋　　唯だ樵人の説有りて月を回る
「三浦晋印（落款）」「安貞（落款）」

宝陀寺（現宇佐市麻生）は仙岩山と号す曹洞宗寺院で、養老元（七一七）年草創と伝えられ、康成年間（一四五五～五七）に羅漢寺（現中津市本耶馬渓町）の末寺になったという[28]。なおこの詩は、『梅園詩稿』に収められており、同書では、「時」が「還」、「布」が「是」となっている[29]。

図一九　⑩三浦梅園誌箋

図二〇　三浦梅園落款

⑪梯隆恭詩箋

七代目村上玄水は、その墓誌銘によると寛政一〇（一七九八）年京都に在学中、久留米の儒学者梯隆恭（一七六八～一八一九）に出会った[30]。その後久留米に留学することになる。隆恭は久留米藩医牛島玄洞の養子であり、梯権助（事績不詳）の娘を娶り梯姓と名乗った。梯の事績をその墓表[31]により紹介すると、一三～四歳頃より久留米梅林寺八代住職・天山和尚に漢詩の手ほどきを受け、当時の藩主（八代目・有馬頼貴）から俸禄を下賜されている。その前後より江戸・京都に遊学し、その後筑前の儒医・亀井南冥（一七四三～一八一四）に従学、久留米帰藩後、藩校明善堂の教授となった。

【史料の原文と読み下し】

（落款）

行々天潮　行々として天潮に暮れ
暮、漸月　漸月出て兼ねて萌ゆ
出兼萌、　却って望む前の游地
却望前　唯看る一片の露
遊地、唯
看一片
霞、

伏水舟中

梯隆恭

「梯隆恭印（落款）」「箕嶺（落款）」

図二一　⑪梯隆恭誌箋

おわりに

以上、現時点で判明した各史料の事跡について瞥見した。添付史料個々の関連性については現在のところ不明であり、今後さらなる調査研究が必要であると思われるが、それぞれが村上家歴代（特に七代目玄水、八代目春海）と何らかの関わりがあることが確認された。

帆足万里は前述したように、従来の先行研究では村上家との交友がほとんど見いだせなかったが、書状を検討することにより、中津を比較的卑近に位置づけていたことや、七代目玄水を医学的側面では敬意を払っていたことが感得できた。三浦梅園に関してもまた、地元杵築で独学する印象が強かったが、中津には師匠がいたこともあり再三通って研鑽を積んでいた様子がうかがえた。

今後の課題は、今回十分に検証できなかった書状に関する早急な調査である。特に清人と思われる「黄錦」の事績に関しては、田中信平との関連の有無も含め、長崎在住の中国人なども視野に入れ再考する必要があると思われる。

【参考文献及び史料】

参考文献

▲今永正樹『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。

▲岡田武彦主編『二程全書』中文出版社、京都、一九七九年。

▲樺島石梁先生顕彰会編『樺島石梁遺文』同会、久留米、一九二五年。

▲国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、東京、一九七九～九七年。

▲神戸輝夫「三浦梅園と藤田敬所」第一四回マンダラゲの会講演レジュメ、中津、二〇一一年。

▲鶴久二郎編『久留米叢書・梯箕嶺先生遺稿』中原明文堂、久留米、一九三三年。

▲中津郷土塾編『豊前中津田信伝』中津、二〇〇〇年。

▲平凡社地方資料センター編『大分県の地名』平凡社、東京、一九九五年。

▲梅園会編『梅園全集』名著刊行会、東京、一九七〇年。

▲帆足図南次『人物叢書帆足万里』吉川弘文館、東京、一九九〇年（新装版）。

▲『帆足萬里全集』上下巻、帆足記念図書館、大分、一九二六年。

▲「三毛の文化」第二四号、中津、一九九五年。

▲ミヒェル・ヴォルフガング編『村上玄水資料Ⅰ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、中津、二〇〇三年。

▲ミヒェル・ヴォルフガング編『村上玄水資料Ⅱ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、中津、二〇〇四年。

▲ミヒェル・ヴォルフガング主編『史料と人物Ⅱ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書Ⅷ、中津、二〇〇九年。

▲目加田誠『唐詩選』（新釈漢文大系）明治書院、東京、一九六四年初版。

▲諸橋轍次編『大漢和辞典』大修館書店、東京、一九五七年

初版。
▲諸橋轍次編『広漢和辞典』大修館書店、東京、一九八二年初版。
▲吉岡義信「江戸中期における一学者の読書記録について」（西日本図書館学会編『図書館学』六九号、一九九六年所収）。
▲吉田洋一「文政年間における大江家周辺の事績」（ヴォルフガング・ミヒェル主編『史料と人物Ⅲ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書X、中津、二〇一一年、所収）。
▲吉田洋一「村上玄秀『論語聞書』（明和六年写）について」（ヴォルフガング・ミヒェル主編『史料と人物Ⅳ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書Ⅶ、中津、二〇一三年、所収）。

史料

▲「諸名家書簡等貼合掛軸」（史料番号：一〇九、本体：一九二・七糎×一二〇・〇糎、本紙：一五二・〇糎×一〇八・三糎、作成者・作成年不明、村上医家史料館蔵）。

付記　本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号23520113）における研究成果の一部である。

注

1 『帆足萬里全集』上下巻、帆足記念図書館、大分、一九二六年。
2 人物の事績などに関しては、基本的には『国史大辞典』により、適宜補足した。
3 今永正樹『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年、一二七頁（「帆足万里の「序文」は残る」）など参照。
4 『解臓記』の注釈などに関しては、拙稿「解臓記并道原」（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料Ⅰ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、中津、二〇〇三年所収）参照。
5 『医も亦自然に従う』一二三～五頁。
6 図五（帆足万里書状）は上下に分割し掲載。
7 史料中の読点は、筆者が補った。以下同じ。
8 帆足図南次『人物叢書帆足万里』吉川弘文館、東京、一九九〇年（新装版）など参照。
9 『医も亦自然に従う』一三〇～一三二頁。
10 中津郷土塾編『豊前中津田信伝』中津、二〇〇〇年、五頁参照。
11 「三毛の文化」第二四号、中津、一九九五年参照。
12 屋形家の事績に関しては、ミヒェル・ヴォルフガング「耶馬溪屋形家の系譜」（ミヒェル・ヴォルフガング主編『史料と人物Ⅱ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書Ⅷ、中津、二〇〇九年、所収）など参照。

13 前掲『豊前中津田信伝』一八～二二頁。

14 程顥（一〇三二～八五）は中国北宋時代の思想家。明道先生と称せられた。弟の程頤(伊川先生)とならび「二程子」といわれ、宋学（朱子学）の祖の一人。

15 『二程全書』巻之五四「銘詩」（岡田武彦主編『二程全書』中文出版社、京都、一九七九年）一八五二～一八五三頁。

16 神戸輝夫「三浦梅園と藤田敬所」第十四回マンダラゲの会講演レジュメ、中津、二〇一一年。

17 吉岡義信「江戸中期における一学者の読書記録について」（西日本図書館学会編『図書館学』六九号、一九九六年所収）参照。

18 天文学書。天主教系漢籍の一つ。中国清代の游子六（名を芸、閩、福建省の人）の編著。康熙一四年（一六七五）「序」。大部分は天地の形体論で、巻末近く西洋四元説や創造主宰神の影響がみられる（『国史大辞典』）。

19 イギリスのT・グレシャムが一六世紀に唱えたもので、「悪貨は良貨を駆逐する」ということばで有名な法則。

20 注一六の神戸レジュメなど参照。

21 『石梁文集巻之五』（樺島石梁先生顕彰会編『樺島石梁遺文』同会、久留米、一九二五年所収）一三丁表～一五丁表参照。

22 目加田誠『唐詩選』（新釈漢文大系）明治書院、東京、一九六四年初版、四七八～四七九頁。

23 征矢野家をはじめ、当時の中津藩医家の事績に関しては、拙稿「文政年間における大江家周辺の事績」（ヴォルフガング・ミヒェル主編『史料と人物Ⅲ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書X、中津、二〇一一年、所収）参照。

24 『医も亦自然に従う』一七四～一七六頁。

25 なお、村上家の論語解釈に関しては、拙稿「村上玄秀『論語聞書』（明和六年写）について」（ヴォルフガング・ミヒェル主編『史料と人物Ⅳ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館叢書Ⅶ、中津、二〇一三年、所収）参照。

26 前蜀、清河の人。字は象文。唐の乾寧の進士。

27 避暑得探幽、忘言遂久留。雲深窗失曙、松合徑先秋。響谷傳人語、鳴泉洗客愁。家山不在此、至此可歸休。

28 平凡社地方資料センター編『大分県の地名』平凡社、東京、一九九五年。

29 梅園会編『梅園全集』名著刊行会、東京、一九七〇年、下巻七二四頁。

30 拙稿「江戸期中津村上家の軍学について」（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料Ⅱ』中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、中津、二〇〇四年、所収）参照。

31 樺島石梁識「梯季礼墓表」（鶴久二郎編『久留米叢書・梯箕嶺先生遺稿』中原明文堂、久留米、一九三三年、三～四頁）。

資料紹介

「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営―

當所　美惠子

はじめに

平成二四年度、中津市歴史民俗資料館に大江雲澤（一八二二～九九）の三男月岡億十郎の孫にあたる青柳敬一郎氏より多数の資料が寄託された。その中に「明治九年十一月　学校書類入　第三聯区担当方」と表面に墨書きされた木製の文箱（縦三〇糎×横二三糎）があり（図一）、木箱の中には七〇余点の資料が収められていた。その大部分は学校新築にあたっての募金人名簿や学校の会計簿といった明治九年から明治一五年までの「三旗小学校」の運営に関係する冊子及び書類であった。

「三旗小学校」は大江雲澤らが運営した小学校で、当校についての研究および資料はこれまで明らかにされていない。また、これらの資料はこれまで不明確であった明治三七年三月以前の「中津市立北部小学校」の沿革に関して手がかりを得る可能性も秘めている[1]。

そこで、当時の学校運営の背景も踏まえ、ごく一部ではあるが、資料から判明した内容を紹介するとともに、「三旗小学校」に関する資料の存在をここに明らかにするものである。

図一　木製文箱の表面墨書（三〇糎×二三糎）

一、明治初期の学校運営

明治九年当時の小学校運営の形態は、新政府による明治五年公布の学制のもと、現在のものとは大きく異なっている。『下毛郡誌』の教育事業の沿革についての記述に、「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なかしめざるべからざるものなり」とある一方で、「学校の維持については各学区に於て負担するを原則とせしが、小学校のみはその小学区に対し就学児童一人九厘（人員男女一万人につき当分の間金九十円の割）の国庫補助をなす」[2]、「学校取建之仕組　一、学校の費用は国民より出し、その出納は市在の世話掛にて之を処理し、官府は唯学校を保護し、其便利を助るのみ」とあり[3]、学校運営は地域住民が担当し、資金は主に地域住民各戸の寄付、募課金、生徒授業料等によるものであった事が窺える[4]。

下毛郡中津町の学校運営については、明治九年一二月四日発行の地方紙『田舎新聞』第四号から、町内を四職学区に分けて担当していたことが分かる[5]。

大江雲澤は、第一聯区から第四聯区に四分された内の第三聯区を担当した。

第三聯区の担当領域は、鷹部屋・二ノ丁北門通り・船頭町・留守居町・弓町・新堀町・姫路町・米町・船町・桜町・豊後町・寺町・仲間町・鷹匠町・餌指町であり[6]、募金簿には、富永章一郎、川村矯一郎、白石常人、山口廣江等の氏名が見られる[7]。

二、「三旗小学校」に関する資料から

○明治九年一一月（雲澤らの運営開始）

大江雲澤・石野銀衛・長野林米の三名が豊後町五十七番地にある「可象小学校」を、前任者である岩井泉より引き継ぐ[8]。

○明治一〇年一月（三旗小学校の棟上げ）

「可象小学校」ではなく「三旗小学校」の名称で、桜町において棟上げを行っている[9]。

なお、「三旗小学校　新築募金人名簿」に初めて「三旗小学校」の名称が見られる[10]。前記「田舎新聞」第四号に「三聯区も此箇桜町に新築しますそう」との記事がある[11]。おそらく雲澤ら三名が可象小学校を引き継ぐ時点で、桜町において三旗小学校として新築する計画があり、「三旗小学校」という名称も雲澤ら三名が新小学校及び地域に対して支援の意志と愛情を込めて付けたのではないかと推測する。

○明治一〇年三月（小学校敷地等の払下げ）

豊後町五十七番地の「可象小学校」の土地及び建物の払下げを受け[12]、その同日に「敷地賦税上納願」により「三旗小学校敷地」として申告している。

○明治一三年二月（小学校敷地と雲澤賦有地との換地）

豊後町五七番地の敷地と「雲澤所有地桜町十六番」の敷地の交換が行われる[13]。この「三旗学校地敷交換願」の記述により（図一八）、新築された「桜町」の敷地と「雲

澤所有地桜町十六番」が同一敷地であり、雲澤が校地を提供していたことが分かる。現時点で、資料から判明しているのは以上である。

おわりに

中津鷹匠町大江医家六代大江雲澤は、華岡流外科医として中津藩医を務め、明治四年に「中津医学校」校長を命じられている。傍ら門人四〇余名の医学教育にあたる等[14]、医業に関して地域に多大な尽力をした。又、薬湯「大江風呂」を造り[15]地域住民への活動も行い「仁術の士」と称された人物である[16]。

今回の資料には会計関連のものが多数あり、三旗小学校の運営について把握するためには重要なものと考える。また、「三旗小学校」運営を通して、雲澤の地域社会への貢献についても明らかにする可能性を秘めており、さらなる資料の解明を今後の取組課題としている。

参考文献

▲大島明秀「一九世紀後半中津における医師大江雲澤の「門人帳」について」（ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀編『中津市歴史民俗資料館　分館医家史料館叢書』第九巻、二〇一〇年所収）

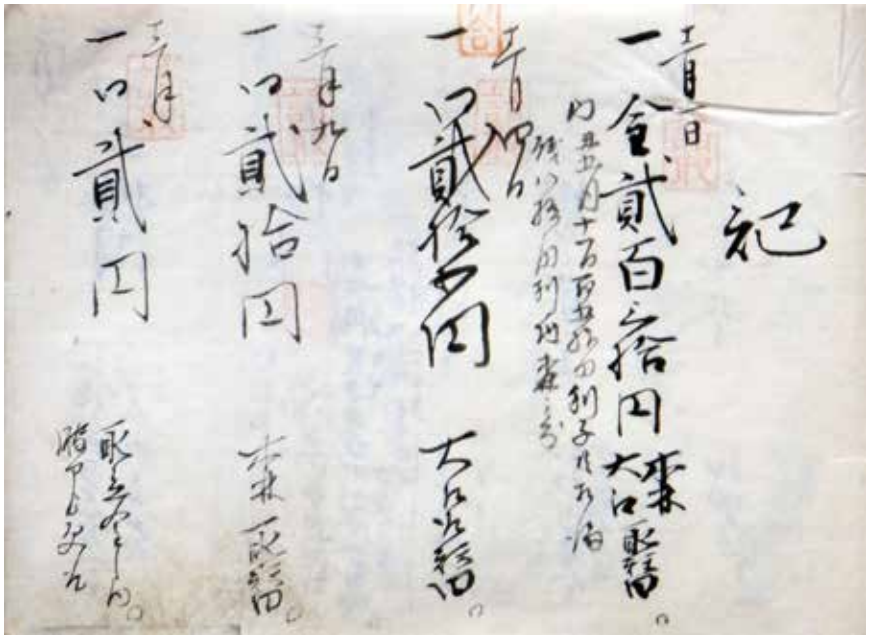
▲川嶌眞人『医は不仁の術努めて仁をなさんと欲す』、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年。

▲大分県下毛郡教育会編『下毛郡誌』、大分県下毛郡教育、一九二七年（復刻版：名著出版、東京、一九七二年）。

▲大分県教育庁編『大分県教育百年史』第一巻通史編一、大分県教育委員会発行、一九七六年。

▲「田舎新聞」第四号、明治九年一二月四日。

▲今永正樹『医亦従自然也　村上医家事歴志』、中津、一九八二年。



図二　金銭出入簿（明治九年 ～ 一四年）（横半帳　一三・四糎×一八・〇糎）

図三　「金銭出入簿」にはさまれていた壱円札

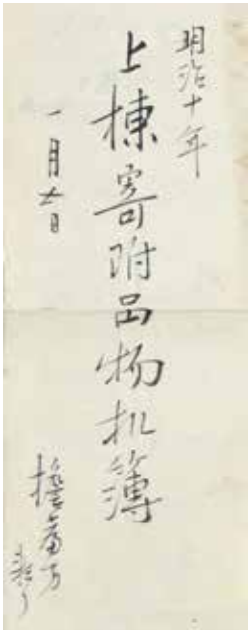
図五　「募金簿」裏表紙に押された可象小学印
（四・一糎×四・一糎）

図四　募金簿（明治九年 ～ 一三年）
（竪帳　二五・五糎×一八・八糎）

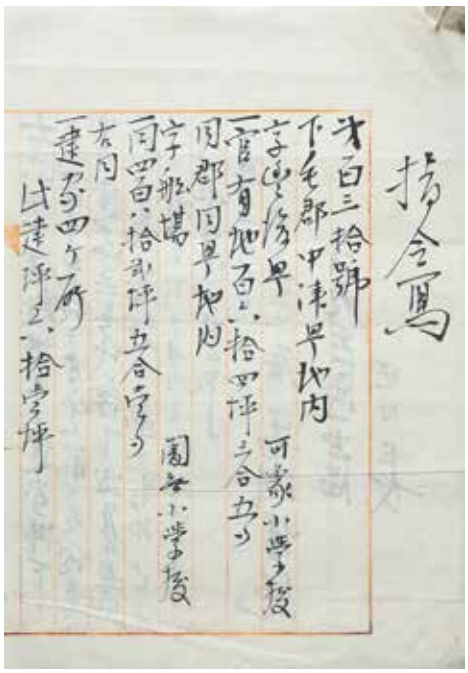
図七　可象小学校への寄附目録

図六　「明治九年　三聯区学校課金姓名簿」
（二六・五糎×一八・八糎）

図九　「三旗小学校　新築募金人名簿」
（竪帳　二二・八糎×一六・四糎）

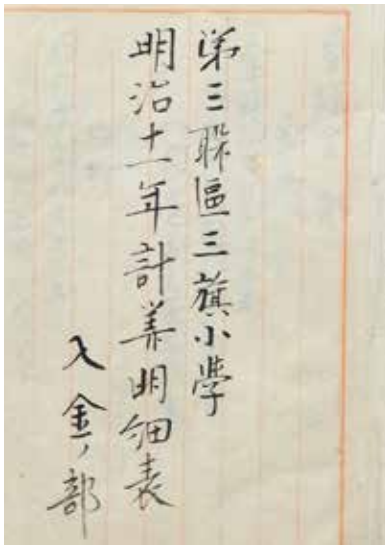


図八　三旗小学校の棟上げに関する
「明治十年　上棟寄附品物控簿」
（横帳　一二・五糎×三四・五糎）

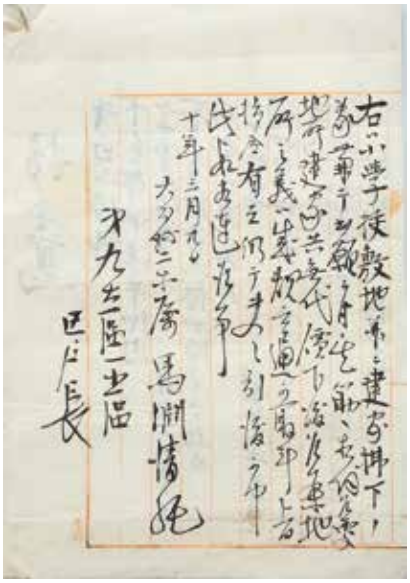


図一一　可象小学校の払下げに関する
「指令写」右面
（一紙　二四・五糎×三四糎）

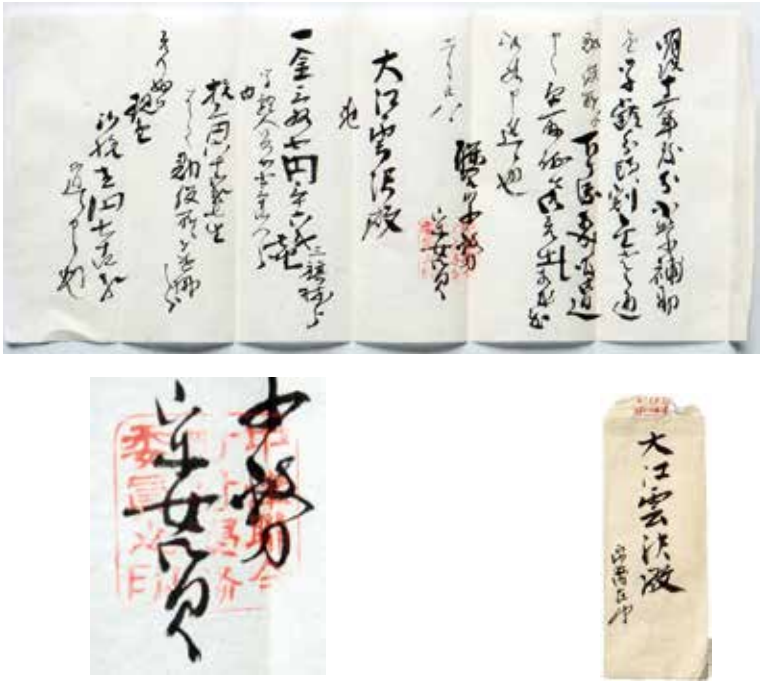
図一〇　「学校新築会計表」
（綴　二四・三糎×一七・〇糎）



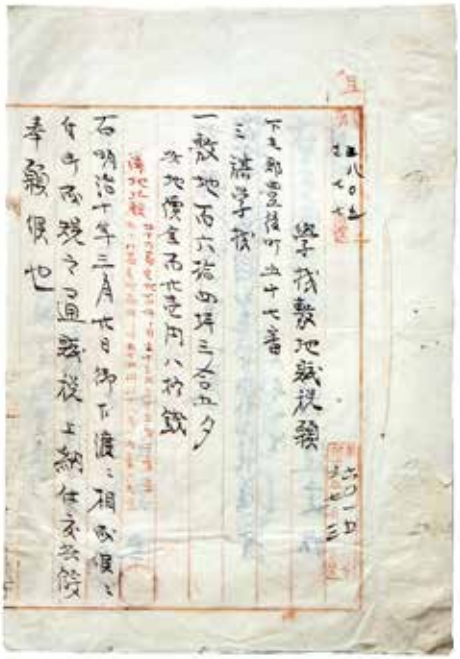
図一三　三旗小学校
「明治十一年　計算明細表　入金ノ部」
（竪帳　二四・五糎×一七・〇糎）



図一二　可象小学校の払下げに関する「指令写」左面
（一紙　二四・五糎×三四・〇糎）

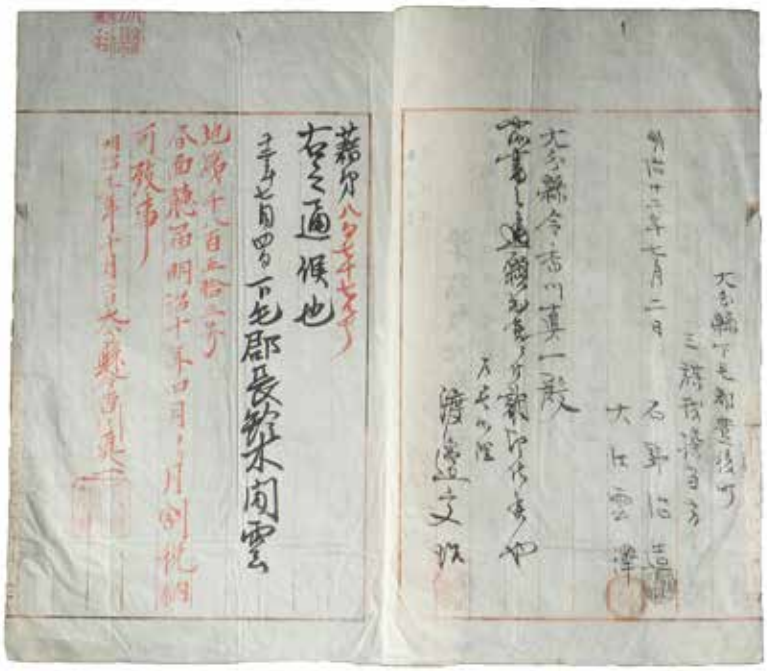


図一四　明治一二年小学補助に関する大江雲澤宛の書簡
（一紙　一六・四糎×三七・七糎）



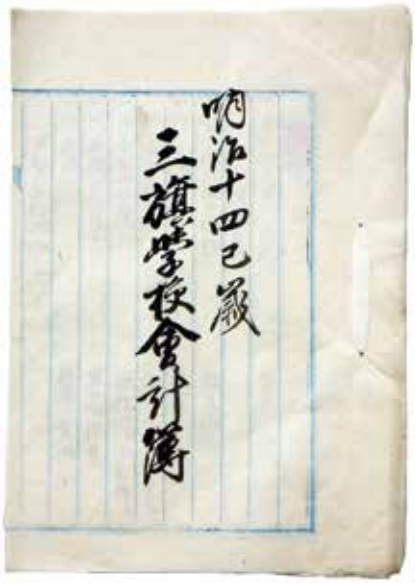
図一六　明治一二年「学校敷地賦税願」
（綴　二四・五糎×三四・一糎）

図一五　「学校金出入控」明治一二年七月 ～ 明治一五年五月の三旗小学校出納簿
（横帳　一三・五糎×三九・〇糎）



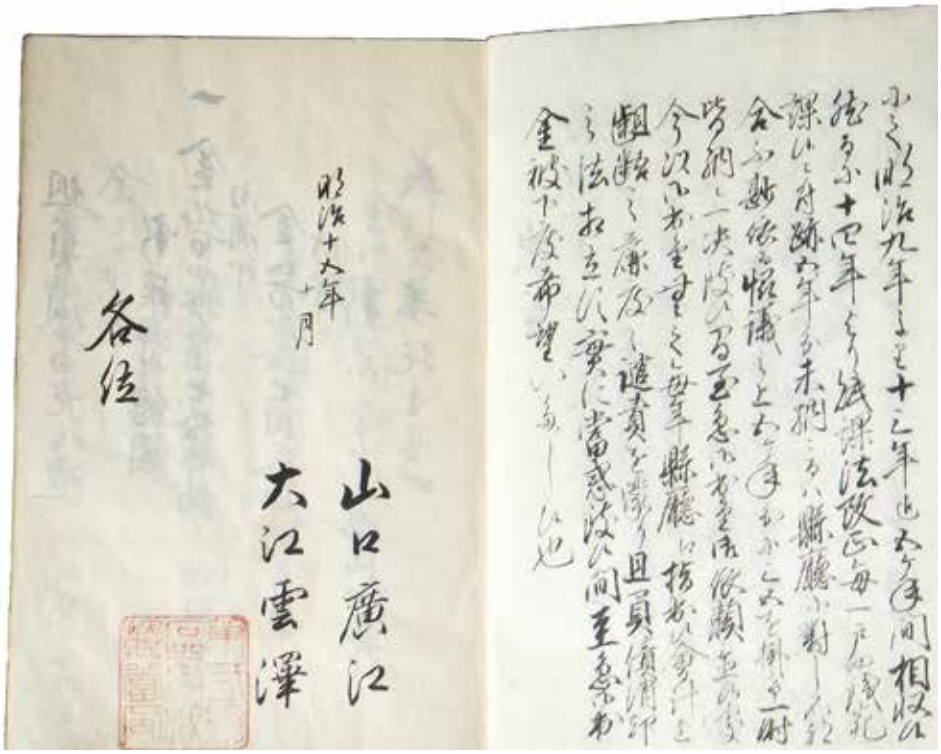
図一七　明治一二年「学校敷地賦税願」
（綴　二四・五糎×三四・〇糎）

図一八　雲澤所有地と可象小学校払下げ地との換地に関する「三旗学校地敷交換願」
（綴　二四・五糎×一七・〇糎）



図二〇　明治一五年の募金簿「三旗小学　学資憤発簿」
（竪帳　二二・五糎×一五・七糎）

図一九　「明治十四己歳　三旗学校会計簿」
（綴子　二四・五糎×一七・〇糎）



図二一　「学資憤発簿」の募金の主旨記載部。山口廣江、大江雲澤の名が見られる。

図二二　包紙の裏面（東京日日新聞）と在中書類一一点

図二三　岩井泉より大江雲澤・石野銀衛・長野林平宛ての包紙

注

1　中津市教育委員会、学校教育課作成「中津の教育」の「学校施設と沿革」より。
2　『下毛郡誌』、五一〇頁～五一二頁。
3　『下毛郡誌』、五一三頁。
4　図二、図四、図六、図一三、図一五、図一九の資料より。
5　『田舎新聞』第四号、第一面雑報より。
6　図九の資料より。
7　図四の資料より。
8　図二二、図二三、図二の資料より。
9　図八と図一〇の資料より。
10　図九の資料より。
11　第一面雑報より。
12　図一一と図一二の資料より。
13　図一八の資料より。
14　大島明秀（二〇一〇年）、三二頁～三三頁。
15　大江医家史料館展示資料「内務省免許　薬湯」より
16　川嶌眞人（一九九六年）、八〇頁～八六頁。

大江医家史料館蔵亀井暘洲揮毫について

中村　江里

亀井暘洲は文化五（一八〇八）年、百道松原（福岡市早良区）で亀井昭陽（一七七八～一八三六）の次男として出生した。幼名は頼母、字は鉄、通称鉄次郎、号を暘洲とした。亀井家は暘洲の祖父・亀井南冥（一七四三～一八一四）を筆頭とする学問（亀門学）の名家として知られる。昭陽の長男蓬洲が文政八（一八二五）年に他界したため、文政一二（一八二九）年に家督を継ぎ、城代組平士に取り立てられ、のち天保三（一八三二）年に御書物預り役を拝命した。百道林亭（現早良区百道浜付近）にて亀井塾を続け、高場乱[1]（一八三一～九一）などの人材を輩出した。明治九（一八七六）年六二歳で没す[2]。

本稿で紹介するのは亀井暘洲（一八〇八～一八七六）の一行書である（図一）。掛軸には「若藥弗瞑眩厥病弗瘳」という『書経』説命編の一節が引用されている。「甲子」は元治元（一八六四）年、暘洲五〇歳の作と思われ、「暘洲」の下には「亀井鐵印」と「革卿」の落款が押されている（図二）。

「若し藥瞑眩せずんば、厥の病瘳えず。（目も眩むような強い作用を起こす藥でなければ、その病気はなおらないものである）」瞑眩は漢方薬の特徴とされている症状で、副作用とは異なり、一時的に症状が悪化するが長くは続かず、その後には慢性の病気が一気に快方に向かう。非常の手段を用いないと成功しないことの例えである。この内容は『孟子』勝文公上編[3]、『呂氏春秋』蕩兵編[4]にも引用されている。

図一　亀井暘洲一行書
（大江医家史料館蔵）。

この大江医家史料館蔵の亀井暘洲の軸とほぼ同様の掛幅が亀陽文庫能古博物館にも収蔵されている（図三）。こちらには「藥弗瞑眩厥病弗瘳」とあり、「辛巳」は文政四（一八二一）年、昭陽四九の時の作である。「昭陽龜昱」の下には「亀井昱印」「元鳳氏」の落款が押されている（図四）。

図二　暘洲落款（大江医家史料館蔵）。

陽洲の父である亀井昭陽は安永二（一七七八）年、亀井南冥の長男として唐人町（福岡県）に生まれた。名は昱（いく）、字は元鳳、通称は昱太郎、号は昭陽・空石・月窟・天山遯者などがある。父南冥に幼少の頃より儒学の教えを受けた昭陽は、寛政三（一七九一）年、周防国徳山藩（現山口県徳山市）の儒僧・島田藍泉（一七五三～一八〇九）に学んだ後、寛政四（一七九二）年南冥が禁足処分となったため二〇才で家督を相続、甘棠館訓導となった。寛政十（一七九八）年、唐人町の火災にて校舎をはじめ亀井家屋敷は全焼、藩は西学の再建を不可とし、儒職を解かれ平士となった。翌年被災跡に家を新築したが、寛政一二（一八〇〇）年に再び唐人町にて出火、百道林に移った。その後平士として藩に仕えながら私塾で門下生の育成に力を注ぎ、天保七（一八三六）年六四歳で没するまでに多くの著作物を残している[5]。

ここで、亀門学の創始者である亀井南冥について述べておきたい。暘洲の祖父にあたる南冥は、儒学者、医者として高名な人物である。徂徠学を肥前蓮池の僧・大潮（一六七八～一七六八）、古医方を永富独嘯庵（一七三二～六六）に学び、その後父・聴因（古医方派の医者）と共に唐人町（現福岡市中央区）で医業を営む傍ら、私塾蜚英館を経営した。安永七（一七七八）年福岡藩に「儒医兼帯」として召し抱えられ、天明三（一七八三）年西学問所甘棠館の学頭となったが、寛政四（一七八九）年に罷免され、失意の晩年を過ごしたのち、文化一一（一八一四）年この世を去った[6]。

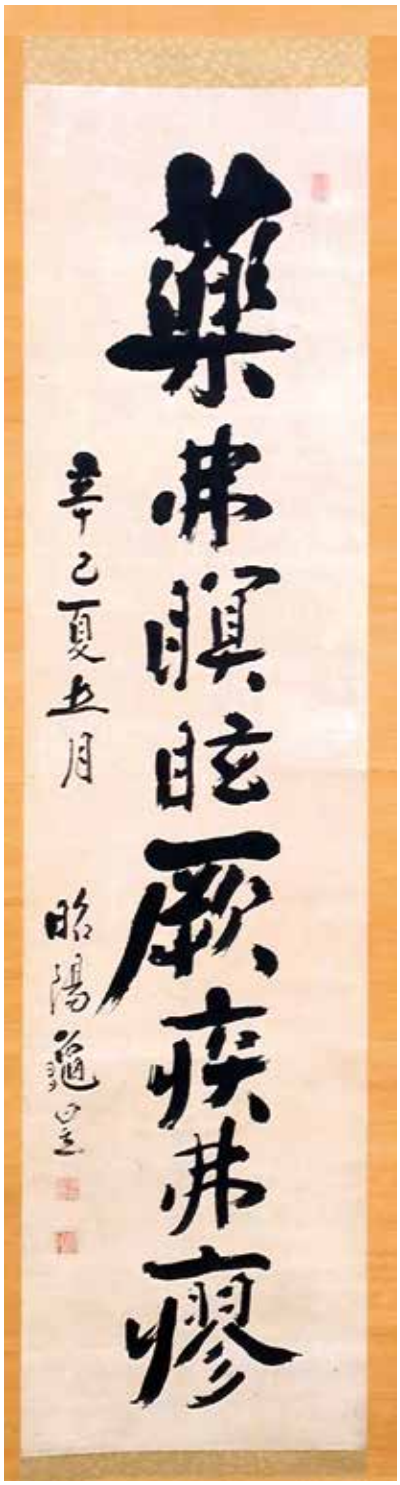
昭陽は寛政元年（一七八九）一七歳の時に『尚書考』二巻を撰述し、享和三（一八〇三）年に『尚書考』三巻、文政八（一八二五）年『尚書考』四巻、天保二（一八三一）年一二巻を著している[7]。経学研究は昭陽の学問の中心を成すものであり、息子暘洲には経学に関する著作は遺されていないものの[8]、当然その教育の影響を受けているであろう。

因みに南冥は自著『南冥問答』（文政八年刊）にて、吉益東洞（一七〇二～七三）が「若藥弗瞑眩厥病弗瘳」の典拠によって『藥微』（明和八年成立）の自序を著したことに対して反論を記しているが[9]、昭陽、暘洲の場合は医学的見地か

らの引用ではなく、純粋に経学研究の立場からの引用だと思われる。南冥の後家督を継いだ昭陽、暘洲は医を業とはしなかったが、曇栄の門に入っていた南冥次男の大壮（一七七五～一八五五）は還俗後医業を甘木に開き、また昭陽の娘婿亀井雷首（一七八九～一八五二）は医業の傍ら儒学を子弟に教育した。

亀井家は南冥、昭陽をはじめ、南冥の弟曇栄（一七五〇～一八一六、黒田家菩提寺・崇福寺住職）、南冥次男大壮、三男大年（一七七七～一八一二）、孫の少栞（一七九八～一八五七）とその夫雷首に至るまで書をよくするものが多い。特に南冥、曇栄、昭陽、大壮、大年は五亀と呼ばれ、記念碑や墓碑銘の揮毫から絵軸の賛書きなど書の依頼が絶えなかった。五亀には含まれないが、暘洲の作品についても多数が現存している。またその書体は亀井流と呼ばれる独特のものである。本稿で取り上げた暘洲、昭暘の一行書も共に堂々とした亀井流の書体で書かれている。

それぞれの軸が揮毫されるに至った背景は不明であるが、書体、文言、また書かれた年代に少々隔たりがあることから考えてみても、亀井の学風が家内でよく継承されていたことがここから見てとれる。



図三　亀井昭陽一行書
（（財）亀陽文庫能古博物館蔵）。

図四　亀井昭陽落款
（（財）亀陽文庫能古博物館蔵）

【参考文献及び史料】

参考文献

▲高野江鼎湖『儒侠亀井南冥』共文社、福岡、一九一三年。
▲三松荘一『福岡縣先賢人名辞典』文照堂書店、福岡、一九三三年。
▲森政太郎『筑前名家人物志』文献出版、東京、一九七九年。
▲荒木見悟『叢書・日本の思想家二七　亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社、東京、一九八八年。
▲小野沢精一『新釈漢文大系二六　書経　下』明治書院、東京、一九八五年。
▲内野熊一郎『新釈漢文大系四　孟子』明治書院、東京、一九六二年。
▲楠山春樹『新編漢文選　思想・歴史シリーズ　呂氏春秋　上』明治書院、東京、一九九六年。
▲町田三郎「九州の漢学者たち」（九州大学中国哲学研究会『中国哲学論集』三十五、二〇〇九年、所収）。
▲（財）亀陽文庫・能古博物館編『江河万里流る―甦る孔子と亀陽文庫―』福岡、一九九四年。
▲阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」（『斯道文庫論集一六』、一九七九年、所収）。
▲久保知里「近世後期福岡藩における御書物預りと書物管理」（福岡大学大学院論集刊行委員会編『福岡大学大学院論集四十二（二）』二〇一〇年、所収）。

史料

▲亀井暘州一行書（本体一九三・五糎×四三・五糎、本紙一二九・七×二九・〇糎、元治元（一八六四）年作成、大江医家史料館蔵）。
▲亀井昭陽一行書（本体二〇二・五糎×四四・〇、本紙三二・〇×一二九・〇糎、文政四（一八二一）年作成、（財）亀陽文庫能古博物館蔵）。

注

1 高場乱は住吉村（現福岡市博多区・中央区・南区）の生まれで、家業の眼科医を継ぎ、男装して患者の家をまわった。安政元年（一八五四）に興志塾を開き、その後多くの青年に教育を施した。

2 荒木見悟『叢書・日本の思想家二七 亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社、東京、一九八八年、三松荘一『福岡縣先賢人名辞典』文照堂書店、一九三三年、一六頁参照。

3 『孟子』勝文公句上に「書曰、若藥不瞑眩、厥病不瘳」とある。

4 『呂氏春秋』巻七孟秋紀に「若用藥者然」と挙げられている。

5 荒木見悟『叢書・日本の思想家二七 亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社、一九八八年、三松荘一『福岡縣先賢人名辞典』文照堂書店、一九三三年、など参照。

6 高野江鼎湖『儒侠亀井南冥』共文社、一九一三年、荒木見悟『叢書・日本の思想家二七 亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社、一九八八など参照。

7 連清吉「昭陽の経学について」（（財）亀陽文庫・能古博物館『江河万里流る―甦る孔子と亀陽文庫―』一九九四年所収）、町田三郎「九州の漢学者たち」（九州大学中国哲学研究会『中国哲学論集』（三十五）、二〇〇九年所収）など参照。

8 暘洲の自著は、安永三年から明治四年の詩文稿を年代順に記した「振古堂文稿」（六冊）があるのみである（阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」（斯道文庫論集一六、一九七九年所収、参照）。

9 吉田洋一「亀井南冥と吉益東洞―日本近世医学小史―」（金沢工業大学日本学研究所『日本学研究』第三号、一九九〇年所収）。

辛島家旧蔵『野槌』について

成富　なつみ

はじめに

『野槌』とは、林羅山の著した「徒然草」の注釈書である。元和七（一六二一）年に成立し、初版は寛永年間（一六二四～一六四四）後半の刊行とされている。『野槌』は、後続する「徒然草」注釈書のみならず、種々の文芸作品に引用されるなど、近世文学に多大な影響を与えている。本稿では、代々中津藩医を勤めた辛島家の旧蔵書である『野槌』を紹介する。

一、書誌

辛島家旧蔵の『野槌』は、上之六、上之八、下之三、下之四の四巻四冊が現存している。縦二六・八糎、横一九・二糎の大本で、紙数は上之六が四七丁、上之八が三四丁、下之三が四九丁、下之四が四一丁である。各冊の一丁表には、辛島氏の蔵書印である「辛嶋藏書」（朱・陽）が押されている。

内題はなく、外題が「野槌」、柱題が「埜槌」となっている。『野槌』の初版の外題は「埜槌」である。この外題が「野槌」と改められて刊行されたのが慶安年間（一六四八～一六五二）であることから、辛島家旧蔵の『野槌』は慶安年間以降に出版されたものである。また、下之末には「羅浮散逸道春題」と記された自跋が掲載されている。

図一　辛島家旧蔵『野槌』の外観（大江医家史料館蔵）。

図二　「辛嶋藏書」朱印

図三　羅山の自跋

二、『野槌』の位置付け

『野槌』は、初めて刊行された本格的な「徒然草」の注釈書である秦宗巴の『徒然草寿命院抄』（慶長九［一六〇四］年刊）を継承し、さらに『徒然草寿命院抄』に不足する部分を補うようにして編まれた。加藤磐斎『徒然草抄』（寛文元［一六六一］年刊）や北村季吟『徒然草文段抄』（寛文七［一六六七］年刊）などの後続する「徒然草」注釈書に多く引用されている。島内裕子氏によると、『野槌』は、『徒然草寿命院抄』の注をほぼすべて踏襲した上で、『徒然草寿命院抄』において、書名のみの掲載にとどまっていた注に対して原文の引用を追加し、「未考」であった部分に新たな注を付すなどしており、「徒然草」の出典研究を完成させたと言い得るものであった[1]。

羅山の『野槌』執筆意図については、川平敏文氏の指摘がある。すなわち、跋文に「今杜撰解亦是開導国俗之窓牖也」とあるように、国俗を導くために「徒然草」に注釈を施した旨が記されていることから、羅山が「徒然草」を読める程度の読者層に対して儒学思想を啓蒙する意図があったと考えられるのである。羅山が儒学思想を啓蒙する姿勢は、「徒然草」に見られる仏老的思想を逐一批判し、儒学思想の優位性を述べていることから窺える[2]。例えば、『野槌』上之六に収録された「徒然草」八二段の注釈には、次のような記述が見られる。

凡仏書を内典とし儒書を下典とする事、浮屠氏よりいふ私にて天下の公論にあらず。聖人の道は天下古今の法にて常とすべき故に其書を経とも典とも名づく。経典の二字みなつねと読り、堯典舜典といひ、五経六経といふは此義なり。浮屠の説をば西域にて修多羅素怛纜なんどいふを翻訳するものの、ことごとしくたふときこと也とて、聖人の書の号をかり、経といひ、典といひ、剰内外の字をくはへて尊異すること也[3]。

経典の名称について、「堯典」「舜典」「五経」のように儒教経典に「経」や「典」の文字を使用することが正統であり、仏典は儒教経典から借用した文字遣いに過ぎないとして、儒学の正当性を述べている。川平氏によると、このような儒仏の違いを意識させる記事は、儒仏論争的な内容を持った寛永後期以降の仮名草子に影響を与えたのである[4]。

また、和書や漢籍、仏典など、様々な資料を引用している『野槌』は、仮名草子や浮世草子にとって故事古諺の供給源であった。『野槌』を典拠とした草子類は、既に多く指摘されているが、一例として神谷勝広氏の指摘した仮名草子『あだ物がたり』を取り上げたい。『あだ物がたり』には、小僧のこうもりにまで批判されて落ち込んでいた老僧ふくろをみみずくが励ます場面がある。みみずくの発言には

毘婆沙論とやらんに、優陀延王、宮女をあまたひきいて、欝毒波陀山にあそひ給ひしに、五百の仙人、こくうをかけりしか、このところを、すくるとて、いろを見、こゑをきゝて、愛念おゝこし、神足をうしない、山林の中へおつる事、まことに、つはさなき鳥のことし、といへり。[5]

とある。この文言は、『野槌』上之二所収「徒然草」八段の次の注釈を引用していることが明らかになっている。

毘婆沙論に優陀延王あまたの宮女をひきゐて鬱毒波陀山にあそびしに、五百の仙人虚空をかけりしが、此ところをすぎて色を見、声をきゝ、香をかぎて、神足をうしなひ、山林のうちに落る事、翼なき鳥のごとし。[6]

神谷氏によると、細部の言い回しまで一致していることから、『あだ物がたり』は『野槌』を直接引用したと考えられるのである。[7]

加えて、神谷氏によって名所記である『京童』と『野槌』の影響関係[8]が、島内氏によって出雲国地誌である『懐橘談』と『野槌』の影響関係[9]がそれぞれ指摘されており、『野槌』は物語のみならず地誌に至るまで影響力のあった作品であった。

おわりに

以上のように『野槌』は近世文学に多大なる影響を及ぼした注釈書であった。故に『野槌』が一般教養書として辛島家に所蔵されていた可能性は想像に難くない。しかし、最後に辛島家が医家であった点を考慮して『野槌』を見てみたい。『野槌』には、医者や医術に関する記述が散見される。『野槌』上之四「徒然草」四二段注には、「徒然草」本文の解釈には不必要な奇病に関する長い記述がある。神谷氏の分析では、この奇病に関する記述は後の「徒然草」注釈書には受け継がれず、『野槌』の特徴的な点であるとされる。[10]

辛島家旧蔵『野槌』には特に識語等が見られず、同家でどのように利用されたのかは定かではないが、今後『野槌』を医学の観点から分析することで、研究上の新しい展開が切り開かれるものと目される。

【参考文献】

▲神谷勝広「『あだ物がたり』と羅山編『徒然草野槌』」（『名古屋大学国語国文学』第七六号、一九九五年所収）。
▲神谷勝広「名所記と羅山編書―『本朝神社考』『徒然草野槌』を軸に―」（『国語国文』第六四号、中央図書出版社、一九九五年所収）。
▲川平敏文「徒然草をめぐる儒仏論争―江戸前期文芸思潮一

斑」（『雅俗』第八号、雅俗の会、二〇〇一年所収）。
▲近世文学書誌研究会編『ゑもん桜物語、あだ物語、うすぐも恋物語』（近世文学資料類従仮名草子編一四）、勉誠社、一九七四年。
▲島内裕子「近世初頭における徒然草の享受」（『国語と国文学』第六六巻第四号、至文堂、一九八九年所収）。
▲島内洋子「徒然草古注釈書の方法―『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」（『放送大学研究年報』一八号、二〇〇〇年）。
▲林羅山『野槌』、慶安年間以降刊、大江医家史料館蔵。
▲室松岩雄編『竹取物語抄補注　徒然草野槌　十六夜日記残月抄補注　世諺問答考証』、国文注釈全書、国学院大学出版部、一九〇九年。

注

1　島内洋子「徒然草古注釈書の方法―『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」、（二〇）～（二一）頁。

2　川平敏文「徒然草をめぐる儒仏論争―江戸前期文芸思潮一斑」、一九～二三頁。

3　室松岩雄編『竹取物語抄補注　徒然草野槌　十六夜日記残月抄補注　世諺問答考証』、九四頁。なお、辛島家旧蔵本は全巻揃っていないため、便宜上『野槌』本文の引用は全て室松岩雄編『竹取物語抄補注　徒然草野槌　十六夜日記残月抄補注　世諺問答考証』を使用した。その際、旧字体は新字体に改め、適宜句読点を施した。以下同。

4　川平敏文「徒然草をめぐる儒仏論争―江戸前期文芸思潮一斑」『雅俗』第八号、二三頁。

5　近世文学書誌研究会編『ゑもん桜物語、あだ物語、うすぐも恋物語』、二二二頁。

6　室松岩雄編『竹取物語抄補注　徒然草野槌　十六夜日記残月抄補注　世諺問答考証』、一九頁。

7　神谷勝広「『あだ物がたり』と羅山編『徒然草野槌』」、七一～七三頁。

8　神谷勝広「名所記と羅山編書―『本朝神社考』『徒然草野槌』を軸に―」、二八～三一頁。

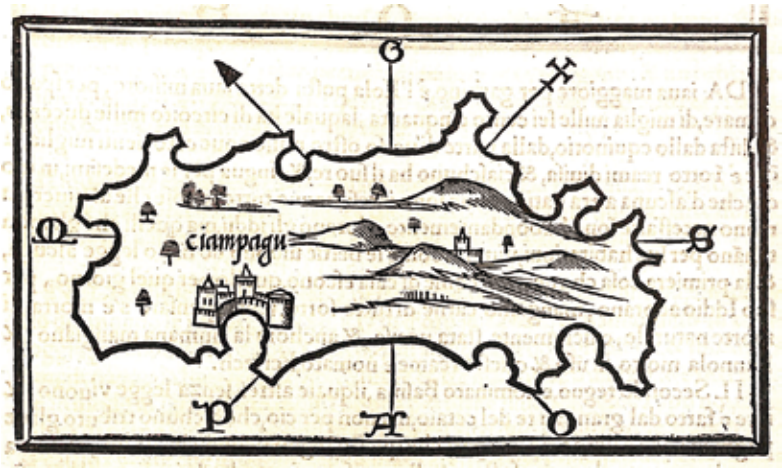
9　島内裕子「近世初頭における徒然草の享受」、三八～四三頁。

10　神谷勝広「『あだ物がたり』と羅山編『徒然草野槌』」、七三～七五頁。

中津が記された最古の西洋図

ミヒェル・ヴォルフガング

ヨーロッパにおける日本図の歴史はマルコ・ポーロの「東方見聞録」に基づく想像図に始まる。一六世紀まで「ジパング」は「カタイ」（中国）の東に位置する、一つだけの大きな島だった。一五四九年にイエズス会士サビエルが鹿児島に上陸し、やがてサビエルの呼びかけに応じた宣教師たちが次々と来日した。彼らはいわゆる「行基式日本図」を入手し、より日本の実情に近いイメージを伝えた。ルイス・ティシェイラ（Luis Teixeira, 生没年不詳）、イグナシオ・モレイラ（Ignacio Moreira, 1538 —?）、ベルナルディノ・ジンナーロ（Bernardino Ginnaro, 1577 —1644）、アントニオ・カルディン（Antonio Francisco Cardim, 1596 —1659）、マルティーノ・マルティーニ（Martino Martini, 1614 —1661）らイエズス会士による日本図は広く流布しており、一七世紀の地図制作者に大きな影響を与えた。これらの地図は宣教師の関心を反映し、主要都市並びに佐渡、石見などの金銀山のほか、優れた学問や社会的影響力で際立っていた「Negoro（根来［寺］）」、「Coya（高野［山］）、「Fiyeizan（比叡山）」なども記載されている。



図一　「ジパング」
（Libro Di Benedetto Bordone, [Vinegia: Nicolo Zoppino], 1528）

一六〇九年に日本に商館を置いた東インド会社のオランダ人（紅毛人）は、なかなかこれらの南蛮系日本図を超えるものを作成できなかった。一六四三年に東インド会社の探検隊が蝦夷地まで航海し、東北地方の海岸地域を船から調査したが、「Yezo」の全貌や日本海側の様子は依然として不明のままだった。一八世紀まで、地図制作者は石川流宣（ともの ぶ）「日本海山潮陸図」など日本の刊行物を参照せざるを得なかった。「内地」については、南蛮系地図の地名に、出島オランダ商館長一行の毎年の江戸参府時に記録したものが付け加えられた[1]。

オランダ人がよく利用した長崎街道や東海道の宿駅、瀬戸内海の主な島々や港は記載されているが、彼らの活動範囲から外れていた「ナカツ」という地名は一九世紀になってようやく登場する。一八二六年、江戸において中津藩主奥平昌高と親交のあった出島商館医シーボルトが、入手した一連の地図などに基づいて、かつてなく充実度の高い日本図を作成し、一八四〇年に刊行した[2]。この「日本人の原図及び天文学的観察による日本帝国図[3]は、「Nakatsu」が記載されている一九世紀の西洋図のうちでは間違いなく最も古いものであるが、筆者が古日本図における地名のローマ字表記を調査したところ、日葡交流時代の一六一七年に発表された遙かに古い地図に「Nacatçu」の記載を確認できた。

地図の上部に「IAPONIA」と記載があり、右下の解説文に「Nippon」とその意味、列島の構成（三つの主要島と数多くの小島）、「州」の数などが紹介されている。発行地はローマで、印刷許可を出した「上司」は教会の上層部である。

IAPONIÆ| Regio, quam indigenæ Nippon, hoc est, principium Solis appel: | lant, tribus præcipuis insulis, præter multas alias minores adia: | centes continetur. Dividitur ab ipsis in 66 provincias, quarum | præcipuam civitatem et numerum districtum in singulis appo: | suimus Solum ferax, et amœnum propter frequentes plu: | vias... |...Anno Domini.1617. Xp[ist]ophor[us] Blancus fecit Romae Super^{m}. permis.[4]

この地図（四二・〇×六六・五糎）は印刷物であるが、現存しているものは一九八五年にロンドンのオークションに出品された一枚のみである。その特徴及び西洋の日本図の歴史における位置づけについて、古地図の収集家兼研究者として国際的に名高いジェイソン・C・ハバードが、数回にわたり詳細に分析している。

地図の彫刻師でフランス人のクリストフォロス・ブランクス（Christophorus Blancus）[5]は、一五九五年から一六一七年頃にかけてイタリアで宗教関係の版画を制作・販売していた。上記の日本図は、一五九〇年イエズス会の巡察師ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano, 1539 —1606）と共に来日したイグナシオ・モレイラ神父の記録をもとにしており、

図二　ブランクス「日本図」に見られる九州地方（一六一七年刊）

日本全国六六カ国など様々な情報を初めて伝える、当時の最も正確なものである。ポルトガル語に基づく表記は日本語の発音を忠実に反映している。

図三　小倉、豊前、中津

イエズス会が豊前国の「Nacatçu」に注目したのは偶然ではなかった。九州平定後の天正一五（一五八七）年、豊臣秀吉の家臣黒田官兵衛（洗礼名シメオン）が豊前国の中の六郡を与えられて間もなく、山口からペドロ・ゴメス神父（Pedro Gómez, 1535 —1600）を招き、三月二〇日（西暦四月二七日）に復活祭を祝った。その際、官兵衛の長男・長政、府内城主大友義統（一五五八～一六一〇）や岐部城の最後の城主・岐部左近太夫一辰らが洗礼を受けた[6]。同年六月一九日（七月二四日）、秀吉は突如として「バテレン追放令」を発布したが、その後もしばらく中津教会の繁栄は続いていた。慶長五（一六〇〇）年には、黒田官兵衛の息子・長政の招きでグレゴリオ・デ・セスペデス神父（Grégorio de Cespedes, 1550 —1611）が中津に居を定めた[7]。神父の居住地（rêsidencia）となったことで、中津は重要な布教拠点に昇格した。しかし、一六〇〇年に正室明智玉子（洗礼名、ガラシャ）と共に中津に入城した細川忠興が、一六一一年のセスペデスの死去を機に徳川幕府の意を受け、領内でキリシタン弾圧を行うようになった。一六一二年四月に中津教会の建物が破壊され、イエズス会の誇りと希望の表象でもある上述の地図が発表された一六一七年まで、中津・小倉地方で数多くの信者が命を落とした。

一七世紀のヨーロッパで刊行された日本教会史のうち、イタリア人イエズス会士ダニエロ・バルトリ（Daniello Bartoli, 1608 —1685）の『日本イエズス会の歴史』（一六六〇年刊）は比類なく優れた書である。第四巻（「将軍様の帝国」）に現れる「Nacatzu」は、一六一八年二月下旬の殉教悲話の舞台

となっている[8]。ブランクスの地図は他の地図制作者大きな影響を与えたが、発行部数は非常に少なかったと考えられる。日本図の作成に携わっていたオランダ人は、日本のカトリック教会の興廃史に関心がなかったので、シーボルトの来日まで中津が西洋図に記載されることはなかった。

参考文献

▲濱名志松『九州キリシタン新風土記』福岡、葦書房、一九八九年。

▲ヴォルフガング・ミヒェル「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について、（ヴォルフガング・ミヒェル編『人物と交流（1）』中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料料館資料叢書、中津市、二〇〇六年）、二〇〜六一頁。

▲Daniello Bartoli: *Dell'Historia della Compagnia di Giesu. Il Giappone. Seconda Parte dell'Asia. Roma*, 1660.

▲Jason C. Hubbard: *Japoniae insulae. The mapping of Japan. A historical introduction and cartobibliography of European Printed Maps of Japan before 1800. Houten: Hes & de Graaf Publishers*, 2012 (Utrecht Studies in Map History 14)

▲Wolfgang Michel: *Geographical names on early modern Western maps of Japan*. In: Hubbard (2012), pp. 106-125

▲Lutz Walter (ed.): *Japan —A Cartographic* Vision. München / New York: Prestel, 1993.

▲Léon Pagès: *Histoire de la religion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651*. Paris: Charles Douniol, 1869.

注

1 W. Michel: Travels of the Dutch East India Company in the Japanese Archipelago. In: Walter (1993), pp. 31-39.

2 昌高公とシーボルトとの出会いの詳細については、ミヒェル（二〇〇六）参照。

3 Philipp Franz von Siebold: Karte vom Japanischen Reich nach Originalkarten und astronomischen Beobachtungen der Japaner. Leiden, 1840.

4 J. C. Hubbard: The Map of Japan Engraved by Christopher Blancus, 1617. In: Walter (1993), pp. 51 — 160. Hubbard (2012), pp. 167-170. 両著書とも大型の図版を所収。

5 Christoforo Bianchi（イタリア語）または Christophe Blanc（フランス語）とも。

6 濱名志松（一九八九）、六九一、七一九頁。

7 Pagès (1869), p. 199.

8 Bartoli (1660), Libro IV, p. 2.

ABSTRACTS

Machiko HIRAO

Tashiro Motonori and Takaki Kanehiro: two doctors from Kyushu who introduced modern nursing in Meiji Japan

This study elucidates the close relationship between two doctors who contributed greatly to the introduction of modern nursing in Meiji Japan. Tashiro Motonori (1839－1898) published the first nursing text, being a translation from English, while Takaki Kanehiro (1849－1920) founded the first Japanese nursing school. However, little attention has been paid to their friendship and cooperation throughout their careers.

Tashiro and Takaki had several features in common. Both were born on the island of Kyushu: Tashiro in Buzen (present-day Nakatsu) and Takaki in Satsuma (present-day Kagoshima). They received their medical education from William Willis (1837－1894), a British doctor who served as one of the foreign government advisors to the Meiji government. Tashiro became a teacher at the Tokugawa Shogunate Medical School, and later an army doctor of the Meiji government. Takaki also worked as an navy doctor of the Meiji government. Furthermore, they kept in touch to exchange medical knowledge and techniques in order to disseminate Western medicine in Japan. For example, Tashiro joined the *Sei'i-kai,* a medical association founded by Takaki, as a member of the board of directors. The records of meetings of the *Sei'i-kai* appeared in the *Iji-shinbun*, a medical newspaper published by Tashiro. Takaki taught at the *Igaku-in*, a private medical school founded by Tashiro, and performed dissections at Tashiro's Anatomy Institution (*Byōtai-kaibō sha*).

Since ancient times, the inhabitants of Kyushu have maintained an intensive exchange with the nearby mainland, and even after the Tokugawa government restricted its foreign relations, Kyushu continued to play a prominent role in Japan's interactions with the outside world. This long tradition of cross-cultural

communication and enterprising spirit had its impact once again at the end of the Edo period with the rapid modernization of Meiji Japan.

Akihide OSHIMA

On the "Secret book about medical treatment and dispensing medicines" kept by the physician family Tabuchi

This study deals with a manuscript entitled the "Secret book about medical treatment and dispensing medicines" (*Iryō-uta haizai hihon*) kept by the Tabuchi family, who over many generations served as physicians in the feudal domain of Nakatsu (Buzen Province). An analysis of the graphical properties showed that the manuscript was written by Hisatsune Genteki, who was the teacher of Tabuchi Genyō, the first physician of the Tabuchi family.

A closer look at the contents reveals that Hisatsune had used as a source the "Short way to medical treatment and dispensing medicines" (*Shōkei iryō-uta haizai*) written by the Confucianist and physician Furubayashi Kentō and published posthumously in 1772. As a mere copy, the prefix "secret" in Hisatsune's title would have made no sense; however, he obviously did not want to share the considerable number of additions and changes he had made to many parts of the text.

Previously, little was known about Hisatsune Genteki. An extensive investigation of related source material showed that his medical concepts had their roots in the school of Shibue Naoharu, alias Shōken. He had received his basic medical education in Nakatsu from the local physician Miwa Tōan, a former disciple of Shibue. Hisatsune then continued his studies under the Confucianist Harada Tōgaku in the neighboring domain of Hiji and finally went to Emura Hokkai a renowned scholar of Chinese studies in Edo. Hisatsune's third son, Harada Ranshū, was involved in the publication of a book on abdominal diagnosis (*Fukushō kiran-yoku, 1810*), a field of traditional studies that was expanded significantly by Japanese medical scholars. Together, these

facts indicate that Hisatsune played a leading role in the circles of traditional physicians in the domain of Nakatsu.

Yōichi YOSHIDA

The social world of the Murakami family as seen in an old hanging scroll

This study deals with an old scroll kept by the Murakami family in the former domain of Nakatsu (Buzen Province). It depicts 11 items such as letters, poems, calligraphies, and a wood-block print, which were arranged neatly and glued onto a large hanging scroll (192.7×120 cm), forming a kind of memorabilia table. Ten sheets are made of Japanese paper, while one sheet appears to be made of silk.

The famous physician and philosopher Miura Baien (1723－1789) features prominently in three of the items. He was born in Kunisaki District in neighboring Bungo Province, and had twice studied (in 1739 and 1743) at the private school of the Confucianist Fujita Keisho (1698－1776) in Nakatsu.

Among the other individuals who could be identified, we find the outstanding scholar Hoashi Banri (1778－1852) from the domain of Hiji, in addition to the Confucian scholar Kabashima Sekiryō (1754－1827) and the military scholar Kakehashi Takayasu (1768－1819), both from the domain of Kurume. The relation between Hoashi Banri and Murakami Gensui (1748－1843), as well as with the domain of Nakatsu, has yet to be clarified. Hoashi may have played a much more significant role in the dissemination of Western science than prior research suggested. The scroll also shows a calligraphy of Tanaka Nobuhira, alias Denshin (1748－1824) from local Nakatsu. Tanaka was a physician and calligrapher who, after a sojourn in Nagasaki, gained a high reputation as the author of the influential cookery book “Chinese table feast” (*Shippoku shiki,* printed in 1784).

索引

あ

あだ物がたり……76～78
綾部絅斎……43

い

医学所……2
医学新聞……3、6、8
石野銀衛……59
田舎新聞……59
醫療歌配劑秘本……17、21、23～25
飲食要論……4

う

ウィリス→Willis

え

江村北海……17、22、25

お

大江雲澤……58～60
荻生徂徠……48

か

懐橘談……77
梯隆恭……38、45、54
可象小学校……59、62、64
括秘録……21
家庭衛生及び治病……11
加藤玄順……24
加藤磐斎……76
樺島石梁……38、45
亀井昭陽……69、70
亀井南冥……54、69、70
亀井暘洲……69、70
辛島家……74、77、78
看護婦規則……12
看護法……6
甘棠館……70
看病心得草……5

き

北村季吟……76
牛痘弁論……4
京童……77
切紙……23

く

倉成龍渚……45

し

柴野栗山……52
ジパング……79
渋江松軒……17、21、24
渋江直治……21
島田藍泉……70
朱丹渓……23
捷徑醫療歌配剤……17、23、24
傷病応急手当法講義……11
証類本草……23
進修館……44

せ

セスペデス→Cespedes
切断要法……4

そ

造化生生新論……4

た

大潮……70
高木兼寛……1、9
高場乱……69
田代基徳……1、3
田代春耕……2
打診図譜……4
田中信平（田信）……38、42
田渕元養……17、21、25

ち

茶談……23、24
治痢經験……23、24

つ

津田玄仙……24
土屋藍洲昌英……21
徒然草……74、76～78
徒然草寿命院抄……76、78
徒然草抄……76
徒然草文段抄……76

て

程明道（程顥）……43
適塾……2

と

東京慈恵医院看護学……10
動物及び人身生理編……4
曇栄……71

な

永富独嘯庵……70
長野林平……68

に

日本詩選……22

の

野槌……74、76～78
野本雪巖……46

は

林羅山……74～78
原田東岳……17、22、25
原田蘭洲成憲……17、22、25
ハリソン→Harrison
バルトリ→Bartoli

ひ

ビーチャ→Beecher
蜚英館……70

久恆秀堅元的……17、19、21、22～25

ふ

腹証奇覧翼……22
藤田敬所……38、43
ブランクス→Blancus
古林見桃……17、23、24
文園雑誌……3、5

ほ

帆足万里……38、40、41、42
保寿新論……4
本草譌括……23
本草綱目……23

ま

松川修山……2
曲直瀬道三……23

み
三浦梅園……38、43、47、53
三旗小学……58
三輪東菴親民……17、21、22、25
民間養生説約……4、6

む
武藤璋禮……2
村上玄水（七代目）……38、41
村上春海……46

め
明善堂……45

や
屋形養民（諸道）……42
山本流外科秘傳書……19～21

り
陸軍軍医学校……4
療治茶談……24
リード → Reade

わ
和歌食物本草……23
脇愚山（蘭室）……40、44
和久田叔虎……22

Bartoli, Daniello……82
Beecher, Catharine E.……6
Blancus, Christophorus……80
Cespedes, Gregorio de……82
Harrison, F.……10
Reade, Mary. E.……10
Willis, William……7

CONTENTS

ARTICLES

Machiko HIRAO
Tashiro Motonori and Takaki Kanehiro: Two doctors from Kyushu who introduced modern nursing in Meiji Japan 1

Akihide ŌSHIMA
On the "Secret Book about medical treatment and dispensing medicines" kept by the physician family Tabuchi 17

Yōichi YOSHIDA
The social world of the Murakami family as seen in an old hanging scroll 38

SOURCE MATERIALS

Mieko TŌSHO: Source materials related to the "Mihata Elementary Schools " in Early Meiji Nakatsu 58

Eri NAKAMURA: A The hanging scroll of Kamei Yōshū kept by the Murakami Medical Archive 69

Natsumi NARITOMI: The book "Nozuchi" kept by the Karashima family 74

Wolfgang MICHEL: The first Western map showing the place-name Nakatsu 79

ABSTRACTS 84

INDEX 87

Wolfgang MICHEL, Yōichi YOSHIDA, Akihide ŌSHIMA
PERSONALITIES AND ENCOUNTERS III
NAKATSU MUNICIPAL MUSEUM OF HISTORY AND FOLKLORE – MEDICAL ARCHIVE SERIES, No. 13
CITY OF NAKATSU, BOARD OF EDUCATION
Daiichi Printing Co., Nakatsu, March 2014.

● 執筆者一覧

大島　明秀（おおしま・あきひで）
熊本県立大学文学部准教授

吉田　洋一（よしだ・よういち）
久留米大学文学部准教授

MICHEL, Wolfgang（ミヒェル・ヴォルフガング）
九州大学名誉教授

平尾　真智子（ひらお・まちこ）
順天堂大学医学部医史学研究室

當所　美惠子（とうしょ・みえこ）
中津市歴史民俗資料館

中村　江里（なかむら・えり）
九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻

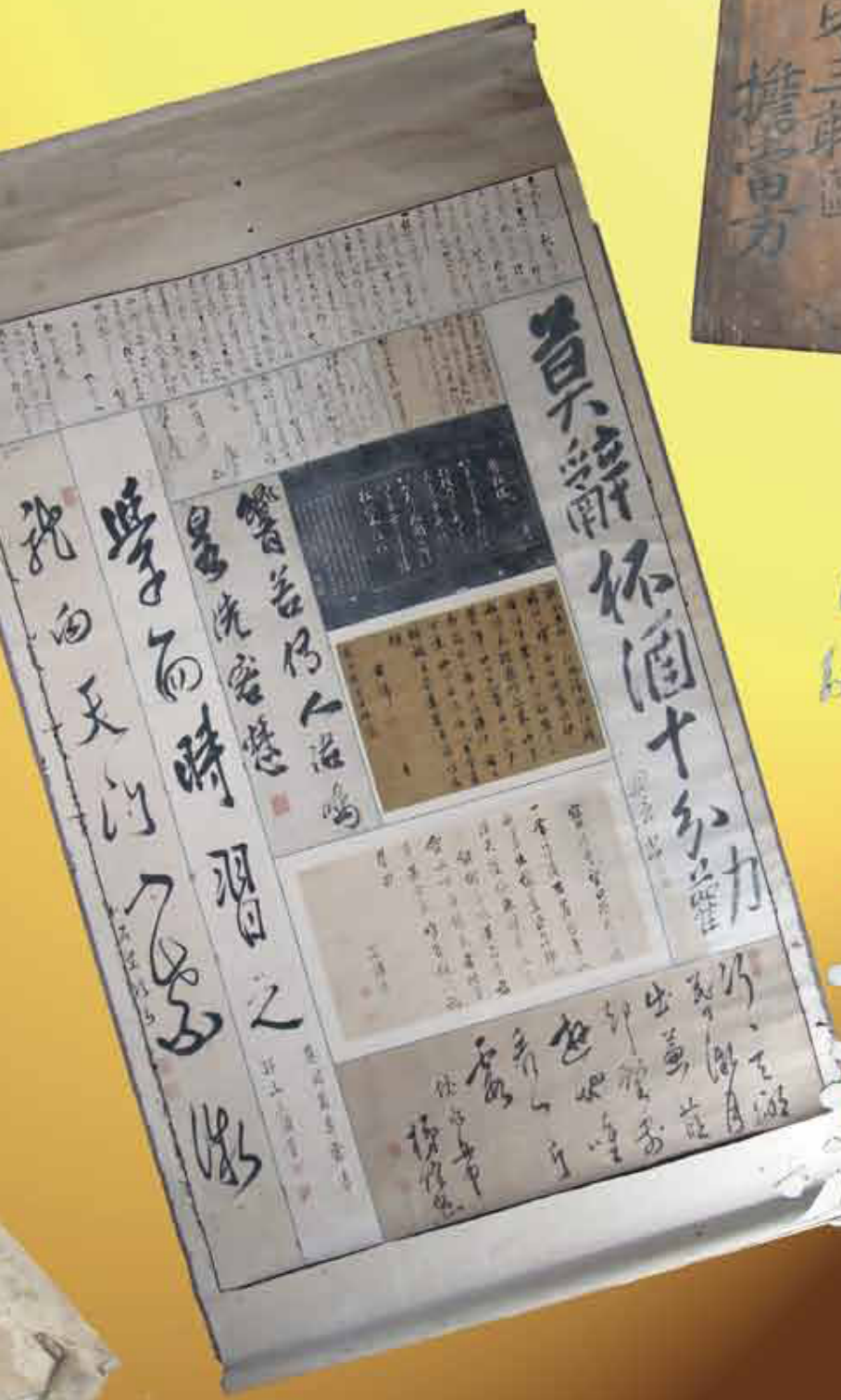
成富　なつみ（なりとみ・なつみ）
熊本県立大学大学院文学研究科

中津市歴史民俗資料館　分館 医家史料館叢書 XIII
ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀　共編

人物と交流 III

平成26(2014)年3月

発行者　中津市教育委員会
発　行　中津市歴史民俗資料館
〒871−0055　大分県中津市1385番地(殿町)
TEL 0979-23-8615
印　刷　第一印刷　株式会社
〒871−0007　大分県中津市大字蛎瀬770



明治九年
十一月
學校書類
第三聯區
擔當方

本藥師瑠璃光如来